Japanese Journal of Applied Psychology
2001, Vol.27. No.1, 37-62

シンポジウム

今，子ども達の問題にいかに関わるか

企　　画　神田信彦（白梅学園短期大学）注1）
司　　会　加藤　啓（彰栄保育福祉専門学校）
シンポジスト　小林　玄（白梅学園短期大学）
岩佐壽夫（家庭ケースワーク研究所）
伊澤正雄（国立大蔵病院）
指定討論者　東　宏行（海老名市教育相談室）

この公開シンポジウムは，平成12年1月29日（土）に，駒沢大学において開催された。

神田：こんにちは，本日は日本応用心理学会公開シンポジウム「今，子ども達の問題にどう関わるか」というテーマで，進めさせていただきます。お忙しいところお集まりいただきまして，ありがとうございます。私は，今回のシンポジウムを企画いたしました神田でございます。よろしくお願いします。

2000年になりましたけれども，過去10年ほど子ども達の問題，「いじめ」に始まり，最近では学級崩壊というあたりにテーマも移ってきていると思いますが，それぞれいろいろな問題が消えたわけではなくてずっと継続しているわけです。こういった問題について日頃それぞれのお立場から関わっていらっしゃる先生方に今日はお願いいたしまして，話題提供者3名の先生，指定討論者の先生にお願いして4時半まで行わせていただきます。フロアーの方々とも質疑応答あるいは討論させていただきたく時間も用意してございますので，ぜひご協力いただきたいと思います。

私の出番はここまでで，あとは司会の彰栄保育福祉専門学校の加藤先生にバトンタッチいたします。

司会：皆さんこんにちは，日本応用心理学会の公開シンポジウム，「今，子ども達の問題にいかにかかわるか」という，考えようによっては壮大なテーマではないかと思うわけです。本日はただいま神田先生からご紹介がありましたが，3名の話題提供者の先生方と，それから，1名の指定討論者の方と合計4名の先生方に壇上に上がっていただいております。それぞれの先生方は，それぞれのフィールドで今現在も実質的に動いていらっしゃる先生方ばかりでございます。さらに加えて，研究的視点ということでも決してそういう視点をお忘れにならない先生方でございますので，そういう学問的な部分と実践的な部分ということでは，非常にバランスのとれたお話が今日は聞くことができるのではないでしょうか。あるいは，そういったところで皆さん方を引き込みまして色々と話を進めていく中で，様々な子どもを取り巻く問題についての理解が深まるチャンスが，今日は与えられるのではないか，そんな風に思っております。

申し遅れましたが私が司会進行をさせていただく加藤でございます。彰栄保育福祉町営市立福祉学校で教員をしておりますが，実は私も長いこと子ども

注1）現所属　文教大学人間科学部

達の問題については現場で色々と活動させていただいて，今教員をやっているというようなわけでして，今日は，司会進行をやれということで大役を仰せつかりました。スムーズに進行できますれば本望でございます。

それでは，さっそくでございますが，スピーカーの方には自己紹介をご自分でしていただいて，そのあと話題を提供していただくというふうな格好で，本日は進行をしていきたいと思っております。終了時間16時30分の予定でございます。それぞれの先生方からおおよそ30分程のお話をいただくというふうなことでございまして，このシンポジウム最後の方には，フロアーの方々とのやりとりもふんだんに盛り込めたらと考えておりますので，皆さんのご協力のほど，よろしくお願い申しあげます。

では，始めに小林先生のほうから話題をお願いしたいと思います。小林先生よろしくお願い致します。

小林：小林です。私は非常勤の仕事を幾つか持っておりますので，アイデンティティを確立するのがなかなか難しいのですけれども，主たる仕事としましては，巡回相談の仕事になるかと思います。これは，都内の幾つかの市の小学校を巡回しまして，時には，親御さんと面談することもありますが，おもに先生方と面談して不適応を起こしている子どもの指導をどうしたらよいか相談するという職務です。いくつかの小学校を回っておりますと，それぞれ地域がかなり離れている場合もありますが，共通して上がってくる問題というのがあります。それを今から，具体的にお話ししてみようと思います。

まず，共通する小学校の現場からの声として，集団になじめない子ども達が増えてきたというものがあります。落ち着きがない子ども達が増えてきた，授業中にうろうろしてしまう，それから，課題をやらせてもすぐに飽きてしまう，しゃべり出すと止まらない。しゃべり出すと止まらないといっても，豊かな内容があるわけではなく。例えば，先生と会話していても交互に口を開いてしゃべっているのですが，全然会話がかみ合わない。それから，情緒面で，すぐカッとしてしまう，気分が変わりやすい，今の今まで友達と和やかに遊んでいたかと思うと，もう仲違いして急に大きな声を出している。それから学習面ですと，ある分野だけ努力を怠っているように見える子どもがいます。ある面を見ると非常に優秀なものを持っているのにどうしてこの分野だけこんなにできないんだろう，やっぱり努力不足なのかと思うような子どもがいるということです。また，わがままが過ぎるというような表現が時々きかれますけれども，そういうような子どももいます。

具体的に聴取したケースでは，避難訓練で校庭に整列する時，1人の子どもがどうしても外に出るのが嫌だと言い張って，1人だけ教室に残っていたがるわけです。先生が対処に困ったという場合や，運動会の練習で，踊りの練習のときには必ず参加しないと言う子どもがいた場合もありました。みんなが参加しなければいけないのに，どうして参加しないのか聞いても「嫌だ嫌だ」と言うだけで，うまくその理由を言語化できないということも少なくありません。

それからだらしがない，身の回りの整理整頓ができない，小学校の中学年くらいになってもまだトレーナーを裏返しにして着てしまったり，ボタンをかけ違えたり，そういうような失敗がかなり目に付く。そういった子どもです。

それからTPOをわきまえない。どういうことかといいますと例えば小学校でいうと友達に対する言葉遣いと先生に対する言葉遣いについて言えば。低学年の子なら低学年の子なりに，使い分けがあってしかるべきなのですが，その努力が全く見受けられない，分けるというような認識が最初からない子が増えているのです。

それから何か友達とトラブルになったとき，「何々ちゃんの立場になってごらんなさい。何々ちゃんだったら，あなたどんな気がする？」という問いかけに対して，ピンとこない。一昔前だと「あっそうだな。自分がそうだったら，ずいぶん悲しいな。」というような考え方ができたように思うのに，最近はどうもそう言ってもピンとこない子どもが増えてきているそういうふうな報告があります。

自分に構ってほしいと主張する子どもも目立っています。例えば，クラスの中に何らかの問題のある子どもがいる場合，その問題が勉強面の遅れであったり，身体面の問題であったりするわけですけれども，そういった子どもがいる場合には，その子に対して個別的配慮というのをする必要があるわけです。そこで先生がそういった子どもに個別的な配慮

をしてあげると，周りの子どもから「自分の方を注目してほしい。どうして何々ちゃんばかり構うのか」と抗議してくる子が出てくるというのです。

それから，子どもに対してではないのですが，保護者とのコミュニケーションがとりづらくなってきたという報告もあります。子どもの問題について具体的な例をあげて説明しても，どうも話がかみあわない。理解してもらえていないような感じを受けるというのですね。

それから，家庭そのものが複雑になってきていて，さまざまな問題を抱えた家庭が増えてきたということも報告されています。

近年のおもしろい ── おもしろがってはいけませんけれども ── 傾向だなと思ったのは，保護者の好みのファッションをさせられている児童がちらほら目立つようになってきたことです。例えば，髪の毛の色を染めていたり，ピアスをしていたり，非常に前衛的なヘアースタイルをしていたりするわけです。思春期以降の子どもですと，自分の趣味，あるいは友達との連帯感として自分から選び取ってそういう形にしているわけですけれども，小学校のしかも低学年となりますと，自分が格好いいと思うからそれをしているのではなく，親に強制的にさせられている場合がほとんどです。実際，担任の先生が本人に問いただしてみると，「他の子と同じような髪型にしたいのだけれど，お母さんがこれがいいと言うから，お母さんにおこられると怖いからこうしている」という答えが返ってくる例があるということです。このような例はまだ多数ではありませんけれども，少し前ですと，そういった事例はほとんどなかったのではないかと思います。奇抜な格好をすれば，周りの子からの見られ方というのが変わってきます。ちょっと変わっている子，個性的な子と言う見られ方をすることによって，やはりそういうふうに振る舞ってしまうことにもなります。そういうようなことが，共通していろいろな地域や小学校の現場からあがってきています。

そこで，集団行動がとれない子どもの気づきのサインというのを考えてみたいと思います。今申し上げたことのまとめになるかと思いますが，まず，落ち着きがないということ，反抗的であったり，過度に依存的であったり，それから，対人関係の取り方が非常に不器用であったり，友達とうまく遊べなかったりすること。集団行動に不可欠な言語の力ですけれども，言葉の発達の遅れ，あるいは偏りがある。それから，感覚的な偏りがあること。感覚的な偏りというのはちょっと分かりにくいと思いますが，特定の感覚，触覚であるとか聴覚であるとか，そういったものに特殊な反応を示すことです。過剰に反応してしまうのです。具体的に例を挙げますと，聴覚的な刺激に過剰反応してしまう子どもですと，非常に大きい音とかに恐怖心を持ってしまうのです。運動会の練習では，時々ピストルを鳴らしますが，それが，腰を抜かす程怖いわけです。必要以上に驚いてしまうのです。そうすると，ピストルがいつ鳴るかとビクビクし続けるような運動会の練習は嫌で嫌でたまらなくなるわけです。校舎の中に逃げ込んでしまうこともあります。それから，その学年のうちの1人の先生が太鼓を音楽に合わせて叩くというような練習だったのですが，その子にとって，太鼓の響く音が非常に耳障りな不快な刺激ととられたんです。ある程度の時間，体育の時間でしたらほぼ45分ずっとその太鼓の音を聞いていなければいけないわけですから。また，音楽にしてもある程度の音量でかけますから，いたたまれなくなってしまうという状況だったわけです。ところがこの子が，聴覚的な刺激に対して過敏な反応をするということを知らないと，ただ練習を嫌がっているとか，校舎に駆け込んで練習に参加しない反抗的な子だというような捉え方をしてしまうことが起こります。その子が例えば，「僕は音に対してこうなんだよ。」というふうに言語的に理路整然と説明できればいいわけですけれども，まあ，なかなか低年齢ということもありますし，そういう子どもは言語的表現がつたないということもありますから，自分ではなかなか表現できないですね。親御さんもしっかりと把握できていない面がありますから，そうしますと問題の核心部分を誰も理解していないということになります。聴覚だけではなく，触覚に過剰反応する例もあります。触覚に特定のこだわりがあってどうしても長袖の肌着が手放せないで，長袖の肌着の上に体育着を着ていた子どもがいました。その子はちょろちょろする落ち着きのない子だったので，担任の先生は，身体的な援助をするわけです。「こっちに来て座りなさい」と手を添えるわけですけれど，それに対して過剰に反応して普通に触っただけなのに

「くすぐったいくすぐったい」と言って身をくねらせてしゃがみこんでしまうのです。あるいは別の子ですと，普通に触っただけなのに「痛い，骨が折れる，先生が叩いた」というふうに過剰に反応してしまうということもあります。それが触覚防御といって触覚に対して過剰に反応してしまう特性なのだということが分かっていないと，大げさに言い立てる子どもというふうに先生にとって，扱いにくい子という捉え方をしてしまう場合もあるわけです。感覚的な偏りがあるというのも気づきのサインになります。それから，手先が学年相当レベルからすると不器用である，運動が苦手であるという子どもも気づかれやすいでしょう。そのような子どもは単に学習面で遅れがあるというだけでなく，友達遊びの中でも遅れをとってしまうことになります。友達のペースについていけないということになりますので，やはり大きい影響を及ぼすということになります。

このような気づきのサインを見出して，その次にどういう対応策をとったらよいのかということになりますが，その前に，ではこの子はどういう子なのかということを評価していく必要があります。診断，判断，評価，そういうことを多角的に行っていかねばなりません。

まず，行動観察です。行動観察というと非常に堅苦しい言い方が，学校の先生や親御さんですと，ごく普通の日常場面でこの子はどういう方面で，どういう反応を示すのか。どういう行動特徴があるのかということをしっかり見て，注意深く見ておくことができます。それから，生育歴，相談歴の聴取ですが，今まで，どういう発達をたどってきたかということです。歩き始めはどれくらいだったのか。何らかの特徴的な発達の仕方をしたのかしなかいのかということです。どこかに相談したことがあるのなら，そういう相談歴も聞いておきます。それから，検査。医学的なものもありますし，教育的なものもあります。検査をして，その子の特徴というものをしっかり客観的に具体的に把握することは大事だと思います。

ここで検査のプロフィールの例がありますのでお見せしたいと思います。これはWISC-Rという知能検査なんですが，知能をIQいくつであるとか精神年齢が何歳何カ月レベルという大ざっぱな捉え方でだけで考えるのではなく，言語性検査と動作性検査と2つの分野に分けて考えるのです。大まかな説明をすると，言語性検査というのは言語的知能，つまり聴覚から入力して，音声，言語で表出するというような回路を使うような知能をはかる検査です。それから，動作性検査，こちらの方は主に視覚から入力して，例えばパズルを組み立てるというような運動，動作で表出するという回路を使った知能をはかる検査になります。それぞれ6つずつの下位検査がありまして，どの領域に落ち込みがあるのか，どういう領域がこの子は得意なのかということが分かるようになっているわけです。この事例ですと，言語性検査の方は標準以上の得点が多いですが。動作性検査は標準以下の得点が多いというふうにばらつきがみられます。このように，偏りがある子どもですと，やはり一斉授業の中では理解しづらい部分がでてきます。理解しづらかったら質問したり，おとなしく座っていればいいわけですが，訳の分からないことを45分間，しかも高学年になりますと5時間6時間授業があるわけですから，それをずっと聞いているというのはなかなか難しいわけです。そうすると，行動面にもいろいろ問題がでてしまうということになります。それから，こちらの他の事例ですと（図），言語性と動作性とでは大きな差というのはないのですが，言語性内，動作性内でかなり大きなばらつきがあります。こういうようなばらつきのある子どももやはりなかなか一斉授業の中では適応するというのは難しいわけです。

アセスメントには，いくつかのルートがあるかと思いますが，最初，その子どもの問題というのをしっかり把握する，あるいは聴取することが大切です。そして，行動観察，その子の様子をしっかり観察します。そして学校内で評価するというようなルートがありますし，これはどうやら心理教育的な機関にかけたほうがいいのではないかと判断された子どもでしたら，先ほど後説明した検査を行って，それから診断して指導プログラムをたてる，というルートになりますし，あるいは医学的な診断を仰いだほうがいいのではないかというようなケースですと，その主訴をしっかりと検討した上で，医療機関にかけて診断するというようなルートが考えられます。

こういう集団不適応の子どもの問題をこのように評価，診断指導する際に，どこか一つの例えば学校

だけ，家庭だけが荷を負うのではなくて，チームで対処するというのが非常に大事になってきます。一つの大きな柱は学校教育だと思います。そしてもう一つはもちろん家庭です。図には家庭と地域教育というふうに書いてありますけれども，まあ主に家庭です。それから，それ以外の治療教育機関というのは，市の教育相談室とか教育センターなどもそうですし，あるいは医療機関なども入って来ると思います。学校教育の中でもその子が在籍している学級だけではなくて，あるいは特殊学級，障害児学級などもそうかもしれません。また通常学級に籍を置きながら，週の何日かはサイズの小さな集団で個別の配慮をする通級学級という制度がありますが，そういった学校教育の中でもさらにチーム体制を整える，多角的に捉えることが非常に大切です。。そしてもちろん担任の先生だけでなく，学年全体でその子の問題を捉える，対処する，考えるということ，それから，管理職の校長先生，教頭先生もしっかりと把握して頂き何かあったときに対処できるようにすることも大切です。また，落ち着きのない子や，反抗的な子どもへの対処の仕方として専科の先生が空き時間にその子のことを面倒みたり，養護の先生にカウンセラー的立場になってもらうという考えてよいでしょう。とにかく担任の先生１人が背負うのではなくて，チーム体制を整えるということが肝心です。中学と違って，小学校というのは学級王国という言葉もありますけれども，その学級を１人の担任の先生が請け負うわけですから，なかなか風通しがよくならないわけです。まわりは担任の先生１人の責任にするつもりはないでしょうけれど，担任の先生からすると，自分がすべての責任を背負っている感じをもってしまうということにもなりかねません。それで，精神的にもダメージを被ってしまうという例も少なくありません。とにかく，チームで対処するということです。

評価，診断するという話をしましたが，問題になりますのが，LD とか ADHD という名称です。これは最近ではマスコミでもちらほら取り沙汰されますので，耳にされた方も多いかと思いますが，ここで簡単な定義付けをして整理してみようかと思います。LD というのは学習障害というふうに翻訳されています。この LD というのは定義付けが非常にたくさん何種類もあるのですが，一番分かりやすい定義付けだと思われるものを紹介したいと思います。まず，発達遅滞はないということ。知的な遅れはない。標準の範囲内である。にもかかわらず，知的な遅れをにおわせるようなものがあるわけです。それから，感覚器官の障害ではない。「何々君，何々君，何々君」と声を荒げて何回呼んでも振り向かなくてもその原因は注意の方にあって，聴覚の問題ではない。耳の器官の障害ではないということです。漢字のドリルを何回もやらせても，お手本を時間を掛けてよく見て模写しなさいといってもなかなか形が取れない。としてもそれは視力の問題ではない場合です。それから，うろうろ歩き回ったり，奇声を上げたり，何だかおかしな挙動が多くても，精神医学的な障害が主原因ではないということ。それから，どうもぎこちない運動をしたり，縄跳びなんかもすぐに引っかかって，手と足の協応運動ができなかったり，はさみなどもうまく扱えなかったりしても，運動障害ではないというケースです。そういった学習する何らかの能力に障害を持って，学習上の困難を伴うもの，認知の偏りがあるもの，そういう子どもが LD といわれています。片や ADHD といわれている子どもがいます。これは，注意欠陥多動障害というふうに翻訳されていますが，集中が続かない，注意がすぐに移ってしまう，衝動的である，感情がすぐに変わる，それから，多動，落ち着きがない，一つところにいない，そういった問題を中核症状とする症候群のことです。LD と ADHD とを併せ持つケースは非常に多いので，混同しやすいのですが，認知の偏りがなくて，単に多動だけを持つ子どももいますし，多動を持たずに認知の偏りだけ，学習上の問題だけという子どももいます。ですから，LD ＝ ADHD ではないということを理解していただきたいと思います。

先ほどの検査などで LD とか ADHD とか名称がつく子どももいれば，つかない子どももいます。ここで大事なのはレッテルづけではなということです。はい LD です，ADHD ですでおしまいにしてはいけないのです。名前が付くつかないは別として，そこから先の子どもの抱えている問題の解決策を考えていくことが重要なのです。ただし，LD，ADHD という名称がついた場合の利点もあります。はっきり LD，ADHD わかれば，その子どもの問題が器質的な問題であるということが明白になったわ

けで，それらは脳の伝達物質の働きのわるさというのが主な原因とされていますけど，そういったところに原因があるのだということを理解して上げることができるわけです。その子どもの認知の偏りがわかっていれば，例えば聴覚からの入力が悪い子に「先生が10回も20回も言ってあげるからよく聞いてごらん」,「先生が説明と同時にやってみせるから，やってみせることを目でも見ていてごらん。」と言った方がその子にとってはぴんとくることがあるかもしれません。それから，先ほどの漢字の例ですと漢字がどうしても書けないとような子に「よく見ていいよ，時間かけていいから書いてごらん」というのは拷問にちかいものかもしれないわけです。それよりも，例えばつくりと篇とかパーツに分けて小さいところから練習させて，達成感を味わわせる方がいいでしょう。あるいは，絵描き歌のように聴覚から書き順などを刺激として提示して教えていくという方がおぼえやすいかもしれません。そのようにひとひねりすることが近道になるわけです。子どもにあった指導法を見いだすためにも，その子がどういう問題を抱えているのかということを先ほどの検査などを使ってしっかりと把握することが大事です。

そろそろ30分になってしまうのでしょうか。

LDとかADHDとかいう名称がつかないままそれでも落ち着きがない，問題を起こすというような子どももいるわけですが，そういった子どもは家庭などの環境要因が非常に大きいと思われますが，そのあたりは岩佐先生のほうに託しつつ，後ほどの討議の時間に付け加えたいと思います。

司会：ありがとうございました。小林先生でございました。皆さんも小林先生のお名前，何と読むのだろうとお思いでしょう。私は始め，男性だろうと思っていましたが，小林しずか先生だそうです。

小林先生のほうからは，「小学生の今」というテーマで，今，小学校の現場でどういう子が問題として浮かび上がっているかということで，お話ししていただきました。その中で，非常に特徴的な部分がいくつかありました。LD，ADHD，学習障害，注意欠陥多動症候群というふうなところで，そこら辺のお話を踏み込んでいただきました。私も先ほどの感覚的なたとえなどのところでは給食の時に，ある音楽が，ある決まってその曲だけなのですが，その音楽が流れてくると耳を塞ぎこんでしまいまして動かなくなってしまうという子の相談を受けたことがありましたが，なるほどこういうふうに解釈すれば，ひょっとしたら何か手がかりがつかめるかもしれないと思いながら，お話を聞かせていただきました。

それでは続きまして，もうちょっと上の年代層だとどうなんだろうか。ここら辺を中心にして，岩佐先生にお話をお聞きしたいと思います。だんだんスピーカーの方が端の方に寄っていってしまいますので，どうぞ先生真ん中の席までお越しいただいて皆さんにお顔が見えるようにお話をしていただけるよう，よろしくお願いいたします。

岩佐：岩佐と申します。

今，小林先生のお話を聞かせていただいて，私の話はどうも理論的ではないなと自分で反省しながら，これからお話をさせていただこうと思います。

どういう角度からお話しさせていただいても具体的な相談の場面から通してきたこと，見えてきたことを通してのお話を申し上げることから，今日のような主題は，私に与えられたテーマにとってふさわしいのかなと思います。

私の簡単な経歴について触れさせていただきますと，スタートは警視庁というところで，少年問題のカウンセラーを20年弱やってまいりました。それから，今から14年前にそこを飛び出しまして，現在，家庭ケースワーク研究所という名称をつけた民間の相談所を運営しております。まだ，日本の社会の中では，子どもの，思春期年齢の子ども達の相談を開業して食べていけるという状況ではございません。21世紀の前半くらいになると，そんなことができるようになるのかなと思いますけれども。相談にお金を払うというのは大変なことのようです。それで，そういうことも含めまして，スクール・カウンセラーを少しやっていたり等々のことがあって，今の仕事を中心にやっておりますことは，公的な機関でやっていたことを民間でやっているという違いはありますけれど，中高校生位の年齢の子ども達とご両親と，その後ろにいらっしゃるもろもろの保護者の方とか学校の先生方の相談を受ける仕事を今でも続けております。

いきなりこんな紹介でお許しいただきたいと思いますけれど。

まず，冒頭，とんでもない事例を申し上げますが，おとととといのことなのですが。今まで，2度3度お目にかかっているクライアントの方なのですが，中学2年生の女の子がお母さんとのトラブルの中で，その時は，お母さんと本人と私の3人の面接の場面を作っていたのですが，いつもどおり来てくれたんですが，いきなりお母様が私に向かって，先生聞いてくれ，と。この子の携帯電話の金額の多さはあまりにもひどすぎる。だから，携帯電話を取り上げたい。取り上げる取り上げないで家でさんざんもめたけど，どうにもならないので岩佐さん，あなたに立ち会ってほしいということなんです。いきなりそんなお話がぽんと出てきたものですから，ちなみに一体いくら使ったのと言うと，分かんない，分かんないということで，請求書が来たので父親も母親も驚いたわけです。1カ月の使用料が18万5千円だったんです。確かに多いなとこれは思いました。その子のお父様は不動産のお仕事をしていらっしゃって，携帯電話は大事なお仕事の材料なわけですが，お父様の使う携帯電話の1カ月の実費が平均してだいたい1万5千円くらいなんです。その10倍を越えているわけです。取り上げるとりあげないでもめて，とりあえず私はこれだったら余りにも高いよ，あなたの私立の月謝の何カ月分にもなるわけですよと。その時はそれから先はあまり言わないままで，家に帰って，彼女が母親に向かって，よくも私に恥をかかせたと，私があそこに行っているのは別のことで行っているのに，何故携帯電話のことを岩佐さんところで出すんだと，いきなりナイフを振り回したんです。お母様には怪我はなかったんですけど，実はこれが金額も含めて携帯電話でもめて親子がとっくみあいの喧嘩になってみたり，その事が引き金になって家を飛び出してみたり，違う問題に発展したりということが，ここのところ続いて4，5件関わっております。こういう問題が多くなってきている。

なぜこんな事例を皆様方にご報告したのかという意味は，一番最初にご報告したいことの理由になるのですが，昨日も内閣総理大臣が施政方針演説で教育問題がとても大事であるという中で，家庭が，学校が，地域が三者一緒になって子どもを育成していかなければという話がありました。ああ，まだこんなレベルでやってらあという感じなんですけれども。もちろんそこで，有識者の方々が入りますから，これから色々な形で具体的な方策が出てくるのでしょうけれども，21世紀の子ども達の問題を考えるとか，子ども達の教育を考える時に出された，これまでの色々な答申案などを見ても余り旧態依然として変わっていない。もちろんそんなことをご報告する，そんなことを思っている私も余り明快な対応策を持っているわけではないので，臨床家としてはお粗末きわまりないのですけれども。目の前の問題にただ追われているだけです。

現実問題として，家庭の力が確かに以前に比べれば，家庭というか両親の子どもを育てる教育力が弱くなってきたことは確かでしょう。けれども，単に弱くなったというよりも，もっと親であること以上に1人の人間として自己主張したいとか，生涯教育をもっとやっていきたいとかいう考え方が広まってきているでしょうから，子どものためだったらあらゆることを犠牲にして親であり続けることをといった考え方は確かに以前に比べれば後退していると思います。現実にぶつけられる話題がいっぱいありますから，この人とその家庭生活を解消したい，つまり離婚したい。ついては，子どもを育てる，引き取って育てる，育てたくない。育てたいとは思うけれど，十分に経済的な援助を相手から貰えるならば育てることはいいけれど，そうでなければこの子のために私がこれから先の何十年かの人生を犠牲にしたくないということをはっきりとおっしゃる方が，これも私の経験的なとらえ方ですが，以前に比べて多くなりました。それから，家庭裁判所の調査官や調停員の方のお話を聞いたりすると，離婚問題の時に子どもだけが浮き上がると。両方の親が子どもはいらないという例が，何と多くなったかと。そういう話を聞かされると，今までは母性だとか父性だとか，子どもを生んだことによって，子どもを育てていくことによって，育てていく中で親子関係や家族というのが凝縮して，固まっていって，昔の言葉をそのまま使わせていただくなら，“帰属性”が強まるというか，どうもそうではなくなってきている。それにしても，実感としては，「家族というものの力が」，「関係が」，「凝縮度」が，「帰属性が」薄らいできたという印象は間違いなく受けているわけです。家庭の持っている教育力を中心として子どもが育てていく，サポートしていく力は以前に比べて弱

くなっている。でも，まだ間違いなく大きな力であろう学校という同年齢，異年齢の集団の中に入っていく中で，子どもが影響しながら大きくなっていく。その力というのも，もちろんいろいろあるだろうけれど，やはりこれも無視できないものだろう。もちろん以前に比べると，地域社会の影響力も弱くなってきている。これももちろんあるだろう。

この3つの状態が色々な形の中でハードにソフトにつながりながら，子どもを守っていく，育てていく，高めていくということには，何ら反論はないのですが，冒頭述べました携帯電話の例で申し上げれば，「情報空間」の子ども達への影響は計り知れないと思います。ここにいらっしゃる方々にくどくど言わなくても，周りのほとんどの方が容認していることだと思います。携帯電話を通しての外からの情報，あるいはやりとりは，家庭，学校集団，地域社会云々とは関係ない，直取引の情報です。そこで入ってくる情報によって子どもが，どんな親子関係の子どもも含めて，内の中で決めたこと，守ろうとしたことは，電話1本でガラッと変わっていく。これも親を通しての電話，加入電話のやり方ではないわけですから，そこには誰も入りようがない。インターネットも含めて，情報が人間を変えていく影響というのが想像できないくらい大きいと思います。もちろん，もっと進んでいるアメリカはどうなのか，比較が私の中で十分されておりませんが。そんなことを思いながら第4の空間がこれから先どういうふうに人間を変えていくのか，あるいは意識や考え方を変えていくのかなということを思ってみるうちに，平成の年になって5，6年ですね，4，5年くらいから子どもたちとつきあっていて，非常に不思議な行動がいっぱいあること気づきました。今日お集まりの方々にはおわかりだと思います。

例えば，渋谷の駅のあたりの階段のところにベターと座り込んで何となく空を見上げている。あるいは，ハンバーガーを食べながら何の会話がなく3人が並んでいる。伝書鳩のハトが止まっているような行動。あるいは，ゲームセンターにかなりの年齢の幅まで，30を過ぎるような，そろそろ中年になろうかという人までが，ゲームセンターで孤独なゲームに楽しんでおります。それをまた，黙ってじっと後ろから見ている子たちが相当おります。漫画喫茶に入りますと，ものすごい量の漫画を持ってきて，食い入るように見ていて，全く会話がない。これだけ人数がたくさんいるのにほとんど，オーバーに言えば，ことりとも音がしない。そういう状態を見ることができる。夜の11時，12時，コンビニエンスストアーの前で，何で中高校生がたむろしているんだろうか，等々。つまり，今申し上げたところは，ある意味では地域社会というところに置かれた場なのですが，全く地域社会に根ざしていない。ということは，これは私は主観的な言い方ですけど，「第5の空間」という呼び方をしてはどうかと。私のような中年の年齢のおじさんやおばさん，おばさんはあんまり行かないんでしょうか？まっすぐ職場から家に帰らないでちょっと寄って，心を癒して帰るというか，本来は家庭が子どもや青少年にとって癒しの場のはずなんですが，今や家庭も癒しの場でなくなりつつある。そうするとどこか，学校からあるいは家庭以外の場からまっすぐ家に帰らないで，どこかに立ち寄らないと自分の中で切り替えがきかない。うちに帰ったとき，親と子が，両親が子どもに向かって発信する話題，会話が，幼児期や小学生のうちはおそらくとてもホットで抽象的で明るく元気な，楽しく毎日過ごしましょうねって感じだと思うんですけど，年齢共に段々現実的になってくる。学力の話だったり，先生とのやりとりだったり，いじめにあったかどうかだったりということで，そして，問題がない子はない子なりに将来の進路といったことを現実的なことで交わされる。そういう会話は，親子関係に直接問題がないときはどうということはないんでしょうが。でも，彼や彼女にはある意味では親子の普通の会話もストレスをためていく。そういうふうに家庭がなりつつある。そんな思いがいたします。

そうすると，ある程度意識的に子ども達は自分の心の中を解放してゆったり過ごせるべき親子との関係，あるいは家庭の中での自分の存在する場みたいなものもかなり意識的に気をつけて行動している。そんな事例にずいぶん出会うことになりました。おかしな分析の仕方になりますが，両親が子どもが育っていく幼児期から，大変大きな心理的なトラブルがあってちょっとした隙間さえあれば離婚してもおかしくない。現実に母親が何度も実家に帰っている，ということを繰り返しながら過ごしてきて，中学校の2年3年になって，今ふうの言葉を使わせて

いただくと，この子の中に相当トラウマが蓄積しているだろうとおもうのですが，あまり親に対して，あるいは親を見ている見方が，非行的な行動に出て，そういった形の中で自分のストレスを解消するような方向に向かったとしてもちっともおかしくないと思うようなケースが，ほとんどそういう形で出てこない。つまり，これは一つの見方であり，あくまで仮説ですが，ちゃんと距離を空けてつきあっているというか，そういうような子ども達というのが以前と比べると多くなりました。これはどうなのかなという思いでおります。大変逆説的な言い方ですが，繰り返し申し上げる時間がございませんから。

こういう第4，第5の空間といわれるような存在はますます子ども達を取り巻き，かつ，そこに子ども達を変化させていくことにおいて，計算できない影響力を持っていくだろうという考えです。現実にそういう情報がいっぱい出されているのではないか。私は臨床の人間ですから，具体的な命題以外のものを取り上げてお話ししたいのですが，たくさん考えられることがあります。不登校の問題だったり，諸々の犯罪を誘致するような問題だったり，そういうことを取り上げていくときりがない。そこでいじめという問題だけを取り上げてさせていただきたいんですが，これは，古く新しく未解決で，今後ともおそらく簡単には直りっこない。いじめなり，不登校の問題が社会問題になってはじめて教育の問題に大きくそれが色濃く出てきて，大きな日本の教育だけでなく社会問題になってきた。そういう意味では日本も先進諸国なんだろうと思いますが，子ども達のいじめの特徴みたいなものを見たときに，もちろん個人差があって，幼児期のいじめ，小学生，中学生頃のいじめ，高校になってのいじめ。いじめを類型化することすら難しい，という感じがあります。登校拒否を類型化するのも難しくなっているのと同じように，いじめも型にはめることは大変に難しい。ですけれども，共通する，ずっと流れている大きな心理的特徴みたいなもの，それをいつも感じます。いじめを起こしている子，被害を受けている子，実際いじめをやっちゃう子，やっている子，それを取り巻いている，例の四重構造といわれる周りの傍観者，それから観衆。全部の子ども達に共通して流れている見方，それを今，とても感じています。

1つは，欲求短絡行動というふうによく言われます。自分の欲求をすごく短い，スパッとつなげちゃう。欲求短絡行動というのは，ご承知のように少年問題の中でも非行を中心に，ずっと長く言われてきたものですから，少年非行の中でも反社会的な問題行動を起こす子ども達の中に大変特徴的に見られると言われる欲求短絡，自分の欲求をストレートに出していく，周りの条件みたいなことは余り考えないです。多くの場合は加害者という形で問題を出してしまう。というのは，非行的な問題行動を起こす子ども達の特徴的なことであるなんて言われ方をしましたけども，ある専門家に言わせると，今の子ども達の平均的な特徴というのが自己中心性とわがままと耐性の無さだと。この3つは，どの子にも共通して見られることだとまで言われると，欲求短絡行動というのは，別に問題行動を起こす子どもの特徴だと言えなくなるだろう。でも，これを仮に善意に解釈すれば，まさに自分の欲求に素直に生きるということでもあるわけですから，今の親御さんが子どもに向かって具体的に言うときに，どんな生き方をしてもいい，やりたいことをやっても構わない，だけど，人様に迷惑をかけないということが唯一の歯止めになるんです。

人様に迷惑をかけなければ何をしてもいいという考え方，これが大変気になります。上手に分析ができないんですけれど，ここに善悪ということを基本に置いた民主的な基準があります。善悪というのは善し悪しです。良いことと悪いこと，やっていけないことと良いこと。その善悪という基準そういうのと，全く本来は次元が違う，対比させるものでもないんですが，感性基準というのがあります。感性基準というのはどういうことかといいますと，それは好き嫌い，おもしろいおもしろくない，ですから個人の好み，このいじめの問題を含めた人間関係の中において，感性基準のほうがいつも優先する社会構造になってきている。それが，人様に迷惑をかけなければ何をしても良いということとが，線でつながってきているのではないか。例えば，こんな馬鹿みたいな質問を子ども達にすることは基本的にはありませんけれども，おまえがやった，岩佐なら岩佐をどう思うんだと言えば，もちろん圧倒的にほとんどの子ども達から，いけないことをしたと思うと反省しているようなことにつながる答えを出してきます。そして，おまえがやったあの行為で岩佐がこん

なんなっちゃった。それを見てどう思ったか。かわいそうだと思ったという答えを私が期待するとすると，おもしろかったという答えが出て来るんです。楽しかったとか，愉快だったとか，ざまあ見ろと思ったとか。裏付けになることは個々人違うんですけれど，そういうような答えが出てくる。その「おもしろい」いじめをやってはいけないことだ。だが，おもしろい。「おもしろい」が優先する。そういういじめの根底にあるような，これは特定のいじめをする子，いじめ的な行動に走ってしまう子の中に見られる特有のものではないという傾向。それが，先ほどの小林先生がいくつかの今の小学生の子ども達の特徴的なマイナス行動をお話しいただきましたけれど，全部の子ども達に共通している，自分の隣に座っている同じ小学校にずっと長く来て，6年間一緒で，中学校に入ってからもクラスは違うけれど，でも一緒で，それで，あいつら知ってる。だけど，友達じゃないっていうんです。友達だといってもいい，友達だけど助けてくれとか何とかしてくれとか，こうしようぜ，と言わない限り自分は手を出さない。あるいは，助けない。あるいは，困ったことない？と言わない。聞かない。それを親切だという認識でしょうか。友達だけど，向こうが具体的に言ってこない限りは関わり合わないことの方がむしろ親切であるという。そういう人間関係というのが小，中学生，高校生という中で共通的に流れていて，だから，大人側，援助者側におります私が，おまえ，友達と5年間，6年間，7年間一緒にいるんだろう。何度も家に遊びに行ったんだろう。どこどこに一緒に遊びに行ったんだろう。そうだ，そうだ。うん，うん。だけど，誰も言ってくれないから，言わないから，だから何もしなかった。というような感じ。私よく冗談混じりに，ずっと，小学生以下，高校生までみんなクレヨンしんちゃんになっているという言い方するんです。「好きな奴がやればあ」ということで，そういう関係ができあがりつつあるという，こんな現実を見ます。

私が今，一番発信したいと思っておりますことは，30数年間子ども達とご両親とに関わってきて，最近の私の中ではどんどん子ども達と年齢が離れていって，直接関わりを持てるのはあと2，3年かなという思いがあるんですけれど，直接中学生，高校生達に向かって発信して行くしかない。これは，政府や行政が言うと嫌な感じになるが，1個人が言うのなら構わないだろうそういうことを言います。つまり，今の10代の青少年達に向かって発信し続けたいという思いで，いくつか自分なりに組み立てております。短い時間でお話できる状況ではございませんが，具体的に言うと，おまえたちが，あなたがたが，おそらく21世紀前半，一番中心的な社会の中で生きる人間になる。その21世紀に，どんな時代にしたいのか，あるいは，あなたが一番中心の中で，20代，30代，40代で生きる時代において，その時代はどんな時代であってほしいのかということを，今，この若々しい理想に燃えている，あるいはいろいろなことがまだ余り入らなくて，自分なりの考え方になっている中で，そのことを真剣に考えてほしい。考え方が間違えていても，違っていても構わない。そんなことを，要するに発信したいのです。そのときに，そんなこと……わからねえよ，別に，知らねえよという言葉で切り捨ててしまわないでほしい。それから，我々が20世紀の中心を過ごしてきたと思っている40代50代60代の方々が，あんたがたにどういう人間になってほしいと思っているか，少なくとも私個人はこう思っているよということで，どんな人間に，どんな望ましい人物像になってほしいのかということを幾つかかみ砕いてい言う。細かく申し上げるときりがないので，項目だけでお許し下さい。自分と考え方や見方や生き方が違う人とも同じテーブルについて話し合えるだけの許容量を持った人間になってほしい。これをもう少しやさしく分かるように話をする。それから，もろもろのストレスが溜まるのは当たり前だと。より早く，より多く，より安くなんてことを求めすぎた20世紀の文化ですから，あるいは経済ですから，当然のごとくその見返りとしてはストレスをためていく。ストレスをためることを，むしろストレスをいかに解消するかなんてことに専念するのではなく，ストレスをためても強くなってほしい。それによって，色々な身体的，精神的疾病を表に顕わして問題回避していくなんてことにならないでほしい。こんなような言い方を少しかみ砕いて言います。3つ目は，我々が，親側が，大人側が一番こだわって来ちゃった問題なんですが，誰から見ても表面的に評価できる価値というものがあります。具体的に言えば，地位とか財産とか能力とかそういうものです

けど，そういうものによって，特にあなた方が見ていて気になるのはお金だよと言うのですが，お金があるかないかということが，その人間の価値みたいなものに見えてくる。その場合，明らかに一人歩きをしている傾向がありますが。そういうものに対して振り回されない人間になってほしいという言い方を高校2年生くらいの年代に言うことが多いんですけど，そんなことをいつも言っております。

これが，どの程度，彼らに分かって貰えるかというんではなく，欺瞞だと言われちゃうかもしれませんが，これが，国が言い出すと非常に問題を感じるんですけれど，国でなければいいかなという思いの中で，最近はこういう発信をしていこうという立場をとっております。それが，今日，主題にある彼らに向かって何ができるかのささやかなことかなと思っております。後で，また別の形の中でご報告させていただきたいと思います。

司会：小林先生，そして岩佐先生。小学生から中学生高校生にかけてということで，そういう流れの中でお話しいただきましたけれど，子どもと私たちとの中で皮膚感覚の対話がないような感じというふうなところで問題が出てきているような気もいたします。触ろうとしたら，フッと子どもが消えてしまう。そういうところもあるのかしらというふうに思うんですけれども。

また，岩佐先生から直接に子ども達に発信するという，ということはやはり，ちょっと私たち大人というか，特に中高年層から上の世代の方というのは，子ども達の価値観というところとはなかなか合わない，理解できない部分が出てきてしまうと思うんですが，それを分からないとか，最近の子ども達はということで片づけない。やはり，子どもに向かってどんどん積極的に自分の考えでもいいじゃないか，気持ちでもいいじゃないか，発信をする。子どもに向かって真正面から向き合っていくというふうな，そういう部分が大切かなというふうにも，私も考えさせられました。

それでは，続きまして，私たちは体の具合が悪くなると，だいたいお医者さんに行くというわけですね。皆さんもよくご存知のとおり，不登校の子どもの場合ですと体の症状が出てきまして，親御さんも心配して病院に連れていこうとします。そこの病院ではサイコロジストがいらっしゃいまして，体に症状は出ているけれど，ただ体の部分だけで見ていてもというふうなところで，サイコロジストもそのお子さんに会うわけです。そのサイコロジストの先生が伊澤先生でございます。病院臨床という分野から，子ども達をどう見るかということにつきまして，お話ししていただきます。お配りしているパンフレット，本日のシンポジウムの資料ですが，生育心理外来とありますが，成育ですのでご訂正をお願いいたします。

では，伊澤先生，お願いいたします。

伊澤：私は，世田谷区にあります国立大蔵病院の中の成育心理外来で心理を担当しています。成育心理外来というネーミングもそうですが，何をしているところかというところからお話ししたいと思います。

成育心理外来というのは，対象年齢は1歳からだいたい思春期までみるということです。思春期というのは曖昧な言い方になりますが，どこに置くかというのが年々後退していって，18などというところでは全然止まらなくて，25，今だと30までどうしてもいってしまうかな。実際，今一番年齢の高い方だと28の方がいます。でも，ここ数年の間には，その記録も破られてしまうのではないかと思われます。

そこでやっていることは，先程小林先生のほうからもありましたが，チームで医療を行っているというのが特徴かなと思います。我々のような心理の立場の者と，精神科，小児神経科，小児科の先生という具合に。チームで見ていかないと，例えば，不登校のお子さんでも頭が痛いとか熱が出るとか現実に色々な症状を訴えますので，ある時は本当に虫垂炎であったり，インフルエンザであったりとかします。そこをどう見極めていくかというのは医療機関の身体的医学だけでは分からないことが多いので，逆に言えば我々の方（心理）もそこを見間違えると大変なことになるので，チームで見ていこうというのが成育心理外来のありかたです。

不登校の子で身体症状が非常にきつくなっていると，目が見えないとか，耳が聞こえないという嘘ではなく，車にはねとばされそうなくらいとか，本当にはねとばされたりとか，そういう症状を起こす子がいます。そうするとやはり，我々心理とか児童精神の先生たちだけでは分からないので，本当に見えていないのか，聞こえていないのかということは，眼科と耳鼻科なりの先生の力も借りて診断していか

なければならないというのが現在の状況であります。正式のスタッフとして眼科の先生，耳鼻科の先生まで入っているわけではありませんが，総合病院の特徴を生かして子どもに関わりのあるすべての科の先生達がその都度援助して下さるというのが，今の成育心理外来のありかたです。

そこでやっているのはネットワークケアという，先ほど言ったように色々な複数の目で診断をし，治療をしていこうという過程です。それを広げて，病院の方では，地域の人たちとの関わりということで，塾とか児童館とか，そういうところの先生達や，フリースクール，サポート校とかいう形で地域との関わり，それから学校との関わり，不登校とかLDでもそうですが，学校との場面で一番トラブルが生じていますので，学校との連携も大きな課題なので学校とも連携を取っていきます。それから，当然家庭の中でもお母さんだけが子どもを見るというわけではないので，すべての同居人と子どもを見ていこうと。学校の中でも，保健室の先生とか交通指導のおばさんを，今何と呼ぶのでしょうか，「緑のおばさん」といっていたのですが，そういう人たちから情報をいただくとすごく分かる場合がある。不登校気味で，今日，何時何分頃ここを通ったけど帰っちゃうのかな，なんていうのは，かえって「緑のおばさん」のほうが把握していたりするんですが，その情報が学校内でうまくまわっていなかったり，保健室登校している子どもの状況が，伝わっていなかったりということが結構あります。

そういうところをネットで見ていければという思いで，我々の方からは学校とつながっていたり，先ほどのサポート校の先生とかフリースクールの先生とも，いわゆる「つながり」を持とうとしています。ここには（会場には），学校関係者が多いのかもしれませんが，学校外でもうちょっと情報交換すれば全然問題にならないですむんじゃないかというケースが，学校訪問してみると出てくることが結構多いかなと思います。ネットワークケア的なことは，発想としては出て来るんだと思いますが，現実にやろうとすると，病院の中はまだ院内ですから，色々な先生たちに働きかけて子どもの多彩な症状を，我々だけでは分かりにくいからお願いしますという形でできなくはないんですけど，これは，一般のルーチンワークとして入っていないのでどうしても時間外に集まっていただいて集団で検討を重ねるということになって，ある意味では善意にすがってやっているというところがあります。

成育心理外来として外来の中では何とかできるんですけれど，院内全体のネットワークという具合に広げようというところで，まず，ちょっとむずかしいかなというふうになります。それと，先ほどお話ししたように，学校と地域と，そういう具合につながろうとしても，やはりそれを誰がどういう具合に連絡を取って，情報をどう回すかということになったら，そう簡単なことではない。現実には……。

そこで，特徴的かなと思えることは，幸いなことに大蔵病院の成育心理外来には，病院応援団というような形で院外の任意団体があるんです。その団体というのは，特殊な，個別な疾患の親の会とかいうことではありません。要するに，地域の縁というのではなく，縁は縁なんですが，全部が患者さんというわけでもありませんが，病院の縁でつながった人たちです。先ほどお話ししたように学校訪問して，そこで担任とつながりができたとか，それから，全くのサラリーマンで特に特殊なものに携わっているというわけではない人だけれども，おもしろそうだから参加しますという人もいます。そういう集団が大蔵病院の中に現実にありますので，その集団を紹介したいと思います。

今，そのホームページ（企画者注 http:///www.asbl.co.jp/hk/）が出ていますが，「発達共助連ホームページ」というのがあります。そこに能書きが書いてありますが，このまま読むと，やたら堅くてすごい組織的な団体のように思われるかもしれませんが，そうではなくて，この発達共助連の名前の由来も次にありますので見て下さい。

ここになぜ連と呼ぶのかという，（字がびっしりですけど，）大ざっぱに言えば，連というのは阿波踊りの中の踊りの団体を連というんです。何々連，要するに日常は違うことをやっていても，お祭りだというと，それだけで集まってきて集団を形成して，お祭り，馬鹿騒ぎして，ハイさよなら，またそれぞれの生活に戻っていくようなことをイメージして作ってある名前で，何とか連合の「連」とか，連帯の「連」とかいう大袈裟なものではありません。何とか協会とかにするとまた，意味が違っちゃうかなということで，こういう発達共助連という名前がつ

いています。名前がついてから9年くらいですか。それまでも全く同じような団体はあったんですが，名無しの権兵衛というか，その都度勝手な名前を名乗っていたんですが，外に対して何かいうときとか，自分たちを説明するのに名前がないのは困るということで名前がつきました。名前はこういう由来でつけましたけど，（ホームページを指しながら）この辺に基本目的とか基本理念とかやたらむずかしそうなことが書いてありますけど，基本的な活動内容というのは大きく言えば，連全体を対象としたディキャンプとかサマーキャンプ等があって，あとは学習や情報交換，親睦を目的とした毎月1回の月例会と称するものがあります。

実際のところ，このディキャンプはどういう意図でやっているのかというと，（いちいちこれがねらいですというほどオーバーなものではないんですけど），ここで子どもさんと親との関わりというのが，親の報告とか子どもの報告とかいうだけでなく，ディキャンプで8時間も見ていればだいたいわかります。いくら装っていても，キャンプが終わる頃になって疲れてくると色々出てきますので。そういうことで，ここ（ホームページ）に書いてあるようなことをねらいとしてディキャンプをやっているんでが……。このデイキャンプも式次第のようなものがあって，何時何分に何々して，何時に食事でというようなものは，ないんです。だから，初めて参加した人は非常に困るみたいで，皆が勝手に何かワアーっとやってるけど「私は一体何をしたらいいんだろう」と立ちすくんでしまうことがあって，2，3回来て，3回目くらいから動くようになりますけど。せめて，何時に何か買うとか，そのくらいやってほしいという意見は出るんですが，10数年ずっとこれできております。

それと，さっきの基本的活動内容の中では，特に触れていませんでしたが，特徴の一つとして，DSという発達支援者を患者さんというか子どもに付けるようにしています。メンタルフレンドですか，そういう名前がついているものともちょっと似てるかなとは思いますが，基本的には治療を中心とした，発達を支援する人で，プロではありません。プロでもいいんですが，プロで手伝って貰える人はプロ（アドバイザー）として手伝ってもらいますし，一般的にはやはり学生さんが多いかなと思います。それから，子育てが終わったお母さん達とか，そういう人たちがこのDSという立場になっています。ねらいが何やら書いてありますが，週1，2回，家庭で一緒に，こういう（ホームページに書いてあるような）ねらいに沿って活動します。それから，先ほど出た学校との連携，月例会への参加。

病院側が「不登校はどうで，本当はこうした方がいい」とか言うより，実際そういうことを経験したお母さん達のアドバイスの方が，「口で言うほどできないよね」というようなことの方が生きた情報となっているようです。そのために月例会ということをやっています。本当は事例研究などのかなり高度なこともやっているんですが，勉強会という名前が嫌いなんで，月例会ということでやっています。月例会には必ず飲み会がつきものなんです。本当は飲み会でない部分で正しく情報が交換されるのがいいんでしょうけど，懇親会での情報の方がかなり有益だったりすることの方が多いと思います。ここにも書いてありますが，例えば，ここで共通理解を図るために事例研究みたいなものもやるし，元不登校だった子にいろいろ語ってもらったり，逆に親の立場だった人に言ってもらったりすると，いろいろな立場が分かったりして非常に情報がうまく流れるというところがあります。

ここには特にねらいとして書いてありませんが，昔もあったかどうか分かりませんが，地域という言葉の中に地域の持つ教育力とか指導力とか，そういうものがあったのではないかと思われます。「地域」があることによって，かなり，不登校のお子さんであれ，LDのお子さんであれ，効果が非常に増すのは確かなんです。不登校のお子さんにしてもやはり，大人と接しているのは親しかいないという状況よりは，いろいろな人からいろいろな意見で入ってくると理解しやすくなる。LDの子でも同じ注意を受けるにしても違う言い方がある。それから，親子関係だって他の親を見るチャンスが今滅多にないんですけれども，ディキャンプやサマーキャンプ，そういうところへ参加すれば否応なしに見ざるを得ない。しかも，式次第みたいなものはないですから，どう動いたらいいか自分で判断しなくてはならないので，そういった面が色濃く出やすいかなと思います。まとめてみると，こういうねらい（ホームページ）を持ちながらやっているんですけれども，地縁によ

らない，ただの飲み会の場でもないし，子ども達にとっては，いろいろなタイプの子ども，異年齢の子ども，性が違う，もしくは子どもを脱したばかりの人の話とか，そういう縦の関係の中で，子どもの持っている（遊び）の伝統みたいなものは少しは伝えられるかなと思っています。子ども達自身も，いわゆる飲み会という大人が言うような飲み会はできませんが，子ども同士は子ども同士で，気に入った者で小さいグループを作ってみたりとかいろいろやっているみたいです。例えば，パソコンとかゲームに関心があればそういうことに関心がある大人が少しサポートして，ゲーム大会のようなことを自分たちでやってみたりすることによって社会性を学ぶとか，積極的に学ぶのではなく，知らない間に学んでいる，その辺をあまり意図的にではなく知らない間に変化しているということをねらってやっているわけなんです。

組織というとオーバーですが，（ホームページの組織図を示しながら）一応名前としてこういうようなものがあって，なるべくなら地域，地縁というほどのことではないんですが，近ければ情報も取りやすいかなということで，今のところ，地域連としてこの1，2，3，4，5の5つに分けてあります。機能連としては，DS連というのは学生が中心になりますけれど，発達支援の人たちの集まりです。助っ人というのは，本当に単純に何だかおもしろそうだから，とにかく手伝うという人たちです。アドバイザー連というのは，医療関係者だとか心理教育関係者とか，ある種特殊な技能を持った人たちの連となっています。この機能連と地域連とはきれいに分かれているのではなく，併せ持って入っている人もいます。組織図としてこのまま見ると，ずいぶん堅い感じがしますが，具体的には家族を中心に登録していただいています。

その他に，地縁によらないで，情報交換する時に，通信というのは，かなり大きい役割を占めます。ニュースレターの発行と同時に，こういうホームページを作って，そこでのやりとりということも新しいメディアをなるべく駆使して，新しい地域みたいなものがうまくできればと思うのです。それと連員掲示板というのがあって，これは一応パスワードなしでは入れないようになっていて，今はどちらかというと連員の独り言のようになっていて，まだ充実していません。外からは，この連に対してどういう意見でも言って下さいということで，何でも入れられるところもあります。それから，当然，大蔵病院とか，あとはLD親の会とか，学校，都立の不登校関係とか，今はまだ少ないですけど，そういうところとも連携して動いています。

今，いろいろと私は分かったような説明していますが，私はここの代表ではありません。ちゃんといるんですが，ここの中の雇われ心理屋さんというのが私の立場かなと思っています。ここにちょっと，一番発達共助連で最も活躍される存在ですと断り書きがあるのが，DSといわれる発達支援者に当たる人たちの働き。いちいち読み上げませんが，そういう人たちが自主的に集まって，自分たちで，彼らは学生が多いせいか勉強会という名前になっていますが，自分たちの研鑽に努めているというのがここに書いてあります。

あとは，よろしければホームページ（企画者注 http:///www.asbl.co.jp/hk/）は開いていますので，そちらを見ていただければと思います。実際この共助連に入っている人たちも，共助連って何だろうと，分かりにくいというか定義付けしにくいんです，かなり。こうやってまとめてみると，何か団体があるように見えるんですけれど，融通無碍のようなもので，（ホームペ--ジの）リレーエッセイというところで，「わたしにとっての共助連」というのがあって，自分なりにいろいろの人たちが定義付けしています。私の定義付けというとオーバーになりますが，どう思っているかと言いますと，コンビニ団体かなと思います。便利な団体。医療関係からいうと診断名がつきました，ハイ，名前はついた，ではどうしますかということが抜けるわけです。風邪ですとか盲腸ですとか言えば，こうしましょうとなるけど，やはり，精神的なところとか発達遅滞がからんだりという場合には，「遅れています」ハイおしまい，となってしまう。では，それをどうフォローしていくのかということなった時に我々医療関係の中だけでは無理で，どうしても教育関係との連携というのは必要なんですけれども，そのときに，学校訪問を何回繰り返してというよりはこういう団体があると，そこにお預けできるので楽かなと思うわけです。学校の先生に聞いてみても，逆に学校側からしてもそういうところがあると非常に楽だと。親に聞いて

みると，今まで1人で抱えていたけれど，こういうところがあると非常に楽だという意見がある。手伝ってもらっている学生にとってみると，自分たちのスキルアップにものすごくつながって，みんなが楽だ楽だと言っている。ちょっと間違えると，無責任につながるかもしれません。誰が責任者なのか訳が分からないところがありますから。ただ，確かにある種楽なんですけど，楽になった部分をうまく子ども達の発達につなげられるゆとりになればプラスなのかなと。これが逆に，みんなでさぼろうということになるとマイナスなのかなと思います。

この地縁によらない地域みたいなこの団体がこの先どうなるか分かりませんけど，今のところ，少なくとも不登校とLD，ADHDに関しては，かなりの成果を上げていると思います。不登校の子どもの中でそのまま閉じこもりという子は今のところ1名も出ておりません。それから，ADHDであったりLDであったりの子も見通しがちゃんとついてその子なりに進学とか就職とか生活の場をかなり確保している子が今のところ100％といってもいいかなと思います。ただ，これから先は本当にこれがいわゆる今までの地域に代わるような形で動けるかどうかはちょっと分かりません。そういう意味ではなるべく一般の地域の構成員と同じくらいの比率になるように，ある特定の疾患の子どもだけ集まってきているとか，スペシャリストだけが集まっているという具合にならないように，うまく発展していければいいなと思っています。

司会：伊澤先生ありがとうございました。病院というと個別のケアが中心というかそれがすべてかなというイメージがありましたけど，今のお話を聞いていますと，病院を縁として，そこからさらに家庭とか地域とかまた別のネットへ広がりを持たせようという試みをされている。非常に目新しく，耳新しくお話をきかせていただきました。

岩佐先生からは，今までの家庭，学校，地域というものが，すでに崩壊しているんだと，新たに第4の空間，第5の空間というのができあがりつつあるんじゃないかということがありました。それを受けるような格好で，伊澤先生のほうからは，発達共助連という，何かアメーバのような組織かなと思いますが，そういうところでやはり，家庭とか地域とかいうことではなく，別の新たな別の空間というか，子ども達あるいはその親御さん達の所属空間作りということで取り組まれているのかなと思います。こんなふうなところで，小学校から始まって中学生あるいはそれ以上の年代層，それから子どもの身を置いている学校とかと別の視点で病院臨床のところからの話題提供というとことでお話をちょうだいいたしました。

続きまして，東先生が指定討論者ということで，ご質問やあるいは投げかけやらということで，お願いしたいんですが。今までの三人の先生方はどちらかというと心理で，東先生は教育系でございまして，同じ子ども達の問題でも少し切り口が違うのではないかと思います。その辺を期待して指定討論をお願いしたいんですが，どうぞよろしく。

東：こんにちは，東です。今紹介にありましたように，教育学を主に研究しています。現在は教育技術であるとか子どもへの働きかけであるとかいった領域に関心を寄せています。最近教育では関係論という分野も出てきまして，関係という視座で子どもと大人の問題を捉えようとするる研究も試みられています。僕も最近はそうした視点からの研究に関心を寄せています。一方で，市町村教委で行われている教育相談の仕事しておりまして研究と実践の二足のわらじで子どもと教育の問題に取り組んでおります。

ここで僕に与えられている役割は，今の三人の方々の報告に対して簡単に感想，それから1つくらいづつ質問をするということです。全体を通して子どもの捉え方ということでは，三人の方々の報告の中に出てくる子ども達の様子については，何となく僕も実感できるような印象です。現場で教育相談の現場の仕事をしていて感じていることですけど，簡単に言ってしまうと，一言でまとめられないように多様化していると言っていいと思います。その中で，小林先生と伊澤先生の報告に共通しているように思うのですが，いわゆるマンツーマンのカウンセリングという手法ではもう対応仕切れない状況が広がっているというのが本音だと思います。ここでは，スクールカウンセリングのあり方と関連させながら議論することは難しいかもしれませんが，ティームで接していく，あるいは連携しあいながら接していく，そういうやり方でないと子どもの姿が見えないし対応しきれなくなってきているというのが実感として

あります。スクールカウンセラーなどもそういった形で，今後生かされていけば相当活用できるだろうとは思うのですが...。それが全体的な感想です。

一人一人の報告にコメントしていきますと，最初の小林先生の報告で小学生の事例があげられていました。集団行動の取れない子どもということで，様々な事例が挙げられましたが，教育関係の方では特に小学校に限って言いますと，学級崩壊という問題がここ数年話題になっています。特に，1997年あたりからこうした状況が出てきたと多くの先生方が指摘されているようです。中学校，高校の場合はあまり学級崩壊という言葉は使わず，主に小学校に限って，学級崩壊という言い方をしているようです。教育学の中ではその要因をいろいろ分析していますし，それに対処するにはどうしたらいいかということで，ティームティーチングといって複数の教員で対応していこうといった試みもされていますが，どれが最も効果的な方法なのかということははっきりしていません。ただ，原因の面では学校制度的な問題が絡んでいるということが指摘されています。実際にそうだなと感じるのは，幼児期からの子育てと小学校の教育がうまく繋がっているのかどうかということです。というのは，1997年という年に学級崩壊という問題がワーッと広まった。その子たちが生まれた年を遡ってみると1990年あたりです。ちょうど1989,90年というのは，幼稚園の教育要領，保育所の保育指針がそれぞれ改訂された年なんです。その年あたりから，幼児教育の中では，自由保育という言い方がありますけれど，遊びをもっと重視して，子ども達の自発性・主体性を重視した援助的関わりということが強調され始めたんです。実際，その年代くらいから保育の内容も相当変わってきたて，遊び中心となってきた。けれど，小学校に入るとクラスがあり，時間も内容も決まっている。このギャップを埋めることが制度上できなかったんじゃないかという指摘がされています。その一方で，少子化の問題がその頃から本格的に取り沙汰されるようになって，各幼稚園，保育所などでは自分の園のカラーを出そうということで，様々な早期教育を取り入れている。これも大きな原因なのではないかと指摘する人もいます。原因は一つには絞れないと思いますが，ここで小林先生にお聞きしたいと思うのは，幼児教育段階からの問題，あるいは環境といったものが，小学校の集団になじめない子にどうつながっているのかということです。小林先生に対してはそのことを質問しておきます。

岩佐先生の報告は，主に高校生の問題ということで，様々な事例を挙げられたのですが，大きく分けると家庭の問題と，最近のいじめの問題に関連して中学生，高校生の心理的特徴ということでお話があったと思います。僕も非常に迷っている部分があるのんですが，その中で，家庭の教育力が弱くなったという指摘がありました。家庭の教育力が弱くなったと言うことを考えるとき，親は子育てしなくなった，あるいは，親が子どもと関係を持たなくなった，関係がなくなってしまっている，という見方があります。その一方で，特に教育社会学を研究している方からの指摘があるのですが，最近の家庭というのは，家庭の中の関係が希薄になったのではなくて，むしろ濃密になっている，あるいは密着しているんじゃないかという見方もされています。つまり家庭の教育力がないというより家庭の教育力があり過ぎというか，しつこい関係になっているのではないかというんです。確かに最近，一卵性母子（おやこ）といった言葉が使われまして，こうした状況については，僕も報告をいろいろしたいくらいなんですが...。不登校児と接する臨床の現場でにいまして感じることは，ずれているのに密着しているような関係が非常に多いことです。不登校の子どもたちの中には言葉をあまりしゃべらない子というのが多くて，何を考えているのかわからないのに自傷行為が絶えないような子もいます。僕は，そんな時に粘土を使ったりして，あえて会話をしないでいろいろなものを一緒に作ることが多いのですが，描画や箱庭等と同じように，言語化できないいろいろな感情が制作物の中に表れてきたりします。中には針山のように尖った木を作ったり，ロープに縛られた人間を作ったり，金槌で潰されようとしている人や階段から転落していく人が出てきたりで，ドキッとさせられるものが作られていくこともあります。多くの親はそうしたものを見ると，一端は受容・共感をして，自分のことのように真剣に子どもを理解しようとするんです。けれどその後で，こういう才能があるんだったら芸術家に向いている，陶芸の勉強ができるところを探してやろうとか，指先が器用だから歯医者がいい，歯学部を目指すように子ども

に言ってみよう，といったふうに考えてしまう。そうした，感覚のずれた親も非常に多い。教育熱心な母親にもこうした感覚を感じることがありますけれど，強く権威のある父親にこうした感覚の持ち主が多いように思います。全然分かっていないなあと思います。いろいろな形で密着して，ある意味では家庭の中の関係が乾いているのに，奇妙な密着型になっているような気が僕はしているんですが，そのあたりはどうなんでしょうかという質問です。

それから後は，やはり岩佐先生のお話の中で，全員の方々にお聞きしたい問題があります。いじめ問題に関するところで，最近の中学生，高校生たちが欲求短絡行動ですか，それと，関わり合わない方が親切であるという考え方を持っているとおっしゃっていました。これは非常によく分かります。関わらない方が親切だと感じる部分が僕には非常によく理解できるんです。例えば，僕は今実際に不登校の子どもと接していて感じるのですけど，よく言葉かけをする段階で，もうちょっと頑張ってみようなとか，頑張ろうねと言ったりする。これで傷ついちゃうんです。確かに頑張ろうなという言葉を裏返してみると，今のままじゃ駄目だよ，もう少し前進しようというメッセージになってしまう。そうすると頑張ろうなと言われただけで，自分を否定されているような気持ちになってしまう。非常に傷つきやすい。あるいは，朝，子ども達と会ったときに，顔色が悪いのでどうしたのと声をかけるとそれだけで傷ついてしまう。どうしたのということは，何かあったんだなと見透かされているような気持ちになるようです。実際にどうもしてない子にとっては失礼な話で家にいてもどうしたのと言われ，学校に行ってもどうしたのと言われ，相談機関に行ってもどうしたのと言われる。「僕は何もどうもしていないです。何もないんです」という子にとっては，何で大人たちは皆，どうしたのどうしたのって，そういう目で見るんですかという気持ちになっていく。僕はそういう大人達の感覚が，ある意味で非常に傷つきやすい感性を子どもに達の中に育ててきているのかもしれないと思う。だとすれば，そこでどういうふうに子ども達に関わったらいいのか，非常に難しいなと思ったんです。それは係わるということ自体をどう考えたらいいのかということになると思いますが...，それが全体に問題提起をしたいことです。

体験的には，ある意味ではそっとしておく。ほったらかし。反応が出るまで待っているという余裕。この余裕というものを今，大人たちが一番失っているのではないかという気がします。何か問題が起きるとすぐ援助しなくちゃ。支援しなくちゃ。働きかけなくちゃいけないと思ってしまう。そして，働きかけをして結果を出さなくちゃいけないと考えてしまう。そうではなくて，待っているという時間が必要なのに，大人がその時間に，それに耐えられなくなっているんじゃないか。体験的ですがそんなふうに僕は思っています。

最後の伊澤先生の話の中では，発達共助連という一つの試みを具体的に挙げておられたのですが，なるほどおもしろい試みだなというふうに思いました。今，話した余裕という問題に関わるのですが，飲み会によって連携が行われるというのは，僕には何となく分かる気がする。不登校の原因はこうですから，こう対応しましょう。子どもの現状が今こうなっていますから，こういう手法で接していきましょう，といった因果関係では子どもへの接し方は割り切れないし，問題解決はしない場合が非常に多いのではないでしょうか。その中で，教育学なども多少文学的な傾向に走ろうとしている面もありますけど，確かに因果関係の論理では教育という営みはとらえきれない。そこで，どうしたらいいかというと，子どもへの取り組み・関わり方について，飲み会で話し合いながらいろいろなことが分かってくるというのは，援助を支える文化の問題として何となく分かります。ただ，実際に病院の中ではこういうことも可能かもしれませんが，学校それから，学校周辺ということに広げていきますと，非常にむずかしいように思います。スクールカウンセラーの活用事業が始まった1995年前後つまり，1990年代の半ばあたりに，カウンセリング的な対応というのが学校の内外にワーッと広まり子どもへの対応の仕方として注目を浴びる。けれど，そこでイメージされていた伝統的な個別カウンセリングといった対応だけでは，今の問題は解決しないということで，その後，システムアプローチに類する方策がいろいろと模索されています。カウンセリングの中にも問題を取り巻くシステムや関係そのものをカウンセリングの対象にしようとする試みがあるようですけれど，多くの場合，家庭，学校，カウンセラー，この三者が連

携しあって接していくシステムアプローチが必要であるという考え方が割合と大きくなってきました。援助する側が連携してシステマティックにアプローチすることで，いろいろな成功例も出ている。ただ，その裏側で，かえってそれが子どもを囲い込んでいるという側面があるということを常に考えておかなくてはと思います。というのは，相談を受けた場合には絶対にプライヴァシーを守る，それは他の人には言わないという守秘義務がある。けれど，システムアプローチの場合，親や教師等の関係者と連携したときに，ある程度いろいろな情報が漏れてしまう場合がある。その時に，それを知った子どもは絶対に不信感を持ちます。あるいは敏感な子ども達は，そうしたことを常に疑っている子場合もあると思います。その点がシステムアプローチ，あるいはティームで接していくときの難しさだと思います。実際に僕も連携というシステムの中で，致し方なく，ある中学生に今日聞いたことをお母さんに話しちゃいけないかな，確認をとろうとしたことがあるんです。いきなりしっぺ返しを食らいました。どういうことになったかというと，大人というのは，皆子どもの敵なんだろ，という目で見られ「大人っていうのは，皆，親の味方なんでしょ」という言葉をつきつけられました。その時点で，その子との信頼関係失ってしまいましたけど...。そういった経験もかつてしました。だからシステムアプローチのしかたは非常にむずかしいなと思っていて，その点を考えながらでないと，ティームネットワークケアをしていくのは難しいかなと思いますがどうでしょう。ただ，大きな可能性は持っているという感想は持ちました。

大体，感想と質問でこんなところです。

司会：教育学的なところからということで，それぞれの話題提供の先生が1問づつご質問いただいて，また全体的なところで，プラス1問という形だったかと思います。では，これから話題提供の先生方に質問にお答えいただくような形の中で，また，お互いにその辺はこういうふうな考え方があるとか，こう考えればいいんじゃないかということも含めて，私の方から最初，先生方に話題を振ってまいりますけれど，そのあたりで，横からでも斜めからでも後ろからでも結構ですから，どうぞ発言をお願いできればと考えています

では，最初に，順番を逆にしてみたらおもしろいかなと思いますので，伊澤先生に，東先生からいただいた，システムとしてアプローチするのは大切だけれども，非常にアプローチするにあたっては難しい部分がかなりあるのではないかということですが，その辺はどのようにご苦心をされているのかお話いただければと思います。

伊澤：私，先ほど，学校の中でも情報がうまくとどいていませんというような言い方をしましたけれど，学校の先生にも守秘義務のようなものがあって，1人の判断で，1人の生徒の情報を全部公開していいというものではないですね。そういうところもあるだろうし，特に病院などですとなおさらそういうのがあります。なおかつ，学校という別の機関にこの子の，例えば，認知のずれがあった場合の検査結果をどう伝えるかとかいうのは，いつも引っかかってくるところです。最初から親御さんの了解なしに学校訪問することはありませんが，学校訪問したい，なぜしたいのかというと，こうこういう学校からの情報が聞たいということで，子どもの発達支援のために学校に行きたいけどいかがですかというようなことは必ず確かめるようにしています。

それから，ちょっと離れるかなと思いますが，やはり，いろいろな人たち，人数がかなり多くなってきますと，例えば12月頃にクリスマス会をやろうかということになって，子ども達中心にということで通信に載せて全体に流したとすると，宗教上の理由によりクリスマス会と名乗るものには参加できないような人もいたりするわけです。それを表現していただくと分かるんですが，何か心の中で黙ったままウーンって思いながらやっていると，だんだんわだかまりになってくるようで，そういうことを初めて表現していただいて，ああそうかという，簡単に宗教物はクリスマスであれ，何であれ，とにかく騒げるものは騒いじゃえというような感覚でいたんではまずいこともあるんだなということで，当たり障りのない忘年会というふうに名前を変えたりすることもあります。大人の方は，むしろ忘年会の方が良かったりするのですが，子ども達には，忘年会よりクリスマスの方が通りがいいかなというところがあっても，やはりそういう問題は常につきまといます。

開示した方が良いのか悪いのか，我々のところでは，共助連というところに入ったときに，自分たち

の情報は原則として開示されるものだと，それを了承した上で入って下さいという形にしてあります。何でもかんでもしゃべって良いということではありませんが，逆にお母さんたち同士，同じ不登校の親たちが「うちはこうでね」と，別に開示するなと言っても，安心できる場だなと思うと，皆さん言っていますので。ただ，変な裏話にならないような配慮はしていますが。基本的には，始めに断りを入れてあります。学校に対してもそうです。学校にはこれとこれは言ってくれるなというようなことは，最初に話をつけて，それについては伝えません。それから，学校から聞いたことも，学校側でこれは言わないで欲しい，学校ではこういう見方をしているけれども，今，これは親に直接言えません，言わないで欲しいというものはもちろんあります。担当している人が1人ならまだしも，その情報を関係者全員に正確に伝えるというのは大変なことです。

病院の中でも電子カルテ化してしまうので，どういう具合にカルテを作っておいたらいいか，模索中です。それから，こういう心に関わる問題では患者さんとの間の一言が大事なので，1時間の面接を全部テープにとって，それを文章に起こしてということはできない話で，そういった問題は常につきまといます。

それから，守秘義務ということで言うなら，教育関係の中の教育相談室，教育相談所とか児童相談所とか，そういうところと繋がろうとしたときも，ものすごく厚い壁があってなかなか越えられないものがあります。就学前にいろいろなケアをしていたとしても，それを学校に伝えるということは，同じ区内の区立のそういう中でも伝えられないみたいです。そういうときには，病院が勝手にやってしまいます。心理的な治療というより，コーディネーターみたいなものです。ちょっとずれましたけれど。

司会：ありがとうございました。

小林先生は三鷹市の巡回相談員をなさっています。公的な立場で動かれているわけですが，そういったあたりで，ネットで動くというかシステムで動くところで情報がどう流れたとか，今までの中でやはり，東先生がおっしゃっていましたけど，子どもからこんなふうに見られたとか，ご経験，体験ございましたら，それも混ぜてちょっとお話しいただければ。

小林：一応，公の立場ですけれども，微妙なものでして，巡回相談員はすべての区，市に配置されているわけではありません。今，試験的にこういう人間を配置したらどう成果が得られるかというような，秤にかけられているようなところがあるわけです。

先ほど，私の話の中でチーム体制を整えましょうということを強調したと思いますけど，それはまさにその通りなんですが，ケースバイケースということは考慮しなければなりません。例えば，自分の子どもがADHDであるということをはっきり分かっていらっしゃる親御さん，子どもの問題を学校教育の中で理解してほしいのだけれども，それをどう伝えていいのか，悩むことがあります。担任の先生のパーソナリティによっては，伝えると色眼鏡で見られてしまう恐れもあるわけです。逆に伝えた方が適切な配慮をきちんとしてくださるということもあります。あまりよいことではないかもしれませんが，担任の先生の考え方や方針をよく理解した上で，どういう伝え方をするのが最良かというのを考えなければならない。システムを作って必ずこういう手順でこういうふうにしましょうというのはあまりうまくないですね。

逆の問題もあります。親御さんの方がどうも子どもの問題をしっかりととらえていないようなケースですね。学校の先生はその問題について非常に悩んでおられて，実際に私も授業参観して，教育相談につなげたり，検査をとったりして新しい指導方針というものをたててみたらどうでしょうと提案するのですが，それをどのように，認識のない親御さんに伝えていくのか，やはり，持っていきかたが非常にむずかしい。ともすれば，教育相談あるいは医療関係にかけてはどうかと伝えると学校の先生はひどいことを言う，うちの子のプライベートなことを勝手に誰かに相談したのかということにもなりかねない。非常にケースバイケースでやっているということです。私の職務もやはりコーディネーターのようなものです。あちこちの狭間にたって円滑に支援体制がとれるようにする潤滑油のような役割かもしれません。

司会：ありがとうございます。

今度は，岩佐先生は純然たる民間という立場ですね。相談ということになれば相談料を取っていらっしゃると思うんですが，民間と，公立の小中学校と

のネットということになるとかなりむずかしいことがあるのではないでしょうか。それをどのようにしてクリアされているのか。あるいは，ネットでしていこうというときにどのような不都合があってうまくいかないというような事例などありましたら，その辺を含めてお話しいただければ参考になるのではないかと思いますが，いかがでしょう。

岩佐：民間だから公的な機関だからということが，秘密保持しなければ云々ということは区別することは全くない，人に関わる仕事をする者の基本姿勢だと思います。ただ，今まで実感として，私も長い間公的な機関におりまして民間になったもので，公的な機関でよく言えば培われた，悪く言えば規制され続けてきた部分が取れるまで，相当時間がかかりました。具体的には，今，加藤さんがおっしゃったように，1時間面接するといくらというペイをいただいております。前なら，いただいたら犯罪になります。そういう切り替えができるようになるまで，スタートしてから5年くらいかかったでしょうか。まず，おっかなびっくり，いくらかかりますけどというようなことを言っていた覚えがあります。ただ，時々秘密保持をしないでとんでもないことになるとか，破廉恥行為をしてしまった何とかとか，テレビでよくありますね。それは，民間であろうと公的な機関であろうと，全く倫理観の問題ですから，秘密をきちんと守っていくというのは当然の義務，責任です。　また，今小林先生がおっしゃったようにつきつめていくと，学校とどう連携するか，病院の医者とどう連携するか，また，病院の方にどう情報を流すか，また，受けとめるかというのは，最終的には，日本的かもしれませんが，非常に人と人の関係でしか動いていない。そうすると，その人と人との関係が信頼関係が基本的にあるとか，お互いが一緒にチームを組んで仕事をしたことがある，経験があるとか，こういうことになると守秘義務何とかより，全部それを飛び越えちゃっているのが現実です。そこでつながっている。当たり前のごとく情報を流し，向こうからも受けている。そこでは何のトラブルもなく。ということは，お互いの技術なり，人間性なりが分かっているのが前提なのかなと。こんなレベルの中で動いていくのは日本的だと言われればそれまでですけど。

小林：少々言葉が足りなかったのかも分かりませんが，検査のことを再三触れてきましたが，検査を受けるに当たっての了解，検査を取った後の検査の情報の公開といったことに関しては，必ず保護者の了解が必要になってきます。ですから，この子どもは検査を行った方がいい。この子どもはこの機関で相談を行った方がいいというケースであっても，保護者の了解が得られないような場合というのは，そこでストップしてしまいます。保護者の了解を飛び越えて勝手に学校の先生なり，私のような人間が勝手な行動をするというのはできません。

司会：それでは，次に東先生からの第2の質問に対して。最近の家庭には密着しすぎてしまって関係が濃すぎる，あるいは関係の過剰と言っていいんでしょうか，そんなところがあって，それが子ども達の問題に反映されていると言い方もできるのではないかということですね。

その点につきまして，岩佐先生いかがでしょうか。

岩佐：東先生から出されたご質問はうなずけるところもあるのですが，同時に迷う。私，先ほど，事例を通してレポートさせていただきましたけれども。親子関係を中心とした家族または人間関係が密度が濃すぎるのか，大変薄くなっているのか，そういう線上の中の濃いのか薄いのかという分け方がむしろなくなっているんではないか。分かっているのは，家族構成メンバーが大変単純化してきていること，地域社会の中の人間関係もどんどん薄れてきている，兄弟数が大変少なくなってきていること。夫婦，親子と単純な核家族化の状況がすすんできている。そうすると今言われた，薄いか濃いかではなくて，人間関係の取り方が，距離のとり方が大変下手になってきているんではないか。だから，濃いとすれば，中学校何年生，小学校何年生のこの子とお母さん，あるいはお父さんとの関係は，どうみても調和がとれていないというようなことだと思います。外との関係が薄くなると，これが希薄なのはまちがいない，外の人たちも干渉しなくなる。身内の，身近の同じ屋根の下に住んでいるというところだけの関係は確かに密度は濃くなっている。いや，距離の取り方が下手になっている。中学生の年齢になっても，靴下をはかしているお母様がいらっしゃるし，社会人になって，勤めに出ている自分の息子を毎日のように手を振って玄関まで送っていかないと，子

どもが帰って来ちゃうという例を見ると，これは密度が濃いとか薄いとかじゃなくて，関係がどうにもならなくなっているという思いがするわけです。

そういう見方をするならば，完全に距離の取り方が下手になってきている，分からなくなってきている。その中で，子離れができない，親離れができない，そういう分け方，表現になるんでしょうね。どうしても距離を取るのが下手になっている日本人を象徴的に表している親子関係というふうに思っています。

司会：なるほどそうですね。いってみれば，距離の取り方が下手になっちゃってそれを右側から見ると関係が薄いってみえてくるのかもしれない。左側から見ると濃すぎるんじゃないかというふうな理解をすればいいのかなと思いながらお話をきかせていただきました。

小林先生，伊澤先生，その事に関連して何かございましたらご発言を。

伊澤：核家族化してきて，子ども達から見れば，感情面も含めて交流できる大人というのが限られています。そういうのをなるべく防ぐためにも，共助連みたいなところであまり制約を持たずに，横で子どもがギャンギャン怒られているところとかいろいろ見て欲しい。それから親の方にも自分との関係だけじゃなくて，他のことをやっている子どもを見て欲しいということがあって，それでなるべく式次第を作らずに（いました。），ちょっと前まで言葉は悪いですが，放牧会って言っていたんです。子ども達を集めて放牧するという，全くの自由ではないけれど，ある程度の責任はあるけど危ないところまで行かない限りはあとは放牧。こっちは何もしません。放牧です。親もついでに放牧して，あの辺で飲んだくれていようが，1人で寂しくポツンとしている親もいるんですね，子どもはワーッとしていてどうしたらいいかわからないと。それから，よく怒るお父さんとか，いろんなタイプの人を感情面というか情緒面も含めて感じられる場ということで意図的というか，我々が密室でカウンセリングを行っているよりはるかに効果があったように今のところ思います。これから先はどうかわかりませんが。

司会：ありがとうございます。

では，第3のご質問。小林先生の方にということで，小学校のほうでは学級崩壊が問題となっていますが，その学級崩壊については，幼児期からのつながりの中であるいは延長線上で起きているのではないかと，そんな指摘がある。これは，保育所，幼稚園等々ですね。幼児教育と小学校とのつながり，これがシステム，制度としてつなげなかった。そんな部分もあるのではないかということですが，小林先生はそれをどうご覧になるかということでお願いします。

小林：私の感じですと，幼児期の教育が原因となって学級崩壊という現象が現れてきているのではないかというのは，その通りだと思います。学級崩壊という言い方がよく取り沙汰されるようになってきましたが，個人的にはこの名称はあまり好きではありません。好き嫌いでものを言ってはいけないんですが，この名称は，ゴミ箱的診断という言い方がありますけど，非常にそれに近い。どういうことかというと，この名称は現象面から問題を捉えているわけです。落ち着かない，まとまらないクラス，収拾がつかなくなってしまったクラスは，もう『学級崩壊』ということでいろいろなものをゴミ箱に投げ入れるように一括りにされてしまうのです。1つ1つの事例を見ていきますと原因は様々なわけです。それでも，Aという原因で学級がまとまらなくなっても学級崩壊，Bであっても学級崩壊というふうになってしまう。具体的には名前をつけたことで本質が見えにくくなっているのではないかという危惧を持っています。

ただ，LDとかADHDの子が学級崩壊の核となる子どもであるという場合は問題が非常に分かりやすいです。一方LDとかADHDではないにもかかわらず，そういう学級のばらつきの原因になるというケースも少なくありません。

大きく分けて，低学年のケースと高学年のケースとでは学級のあり方も様相がちょっと違うように思います。低学年の場合はまさに幼児期の教育環境，保育環境が色濃く影響していると思います。荒れている学級の特に1年生，2年生ですね。その中でどういう事態が起こっているのかというと，例えば，授業中 ── 授業中というのは公私で言うと公，ですね ── 公の時間なわけですから，あまり単独行動はとりづらいはずなんです。それがもう，勝手にトイレに行ってしまうわけです。ちょっと前ですと，あるいはある程度の年齢以上の人の感覚ですと，どう

してもトイレに行きたくなってしまったら，がまんできないけれど，それを先生に言うのは気恥ずかしいなと，でも我慢できないから言わなくちゃならない。どうしようという葛藤が生じるはずなのです。そういう気持ちを持っている子もいるのですけど，そういうのが欠如している子どもが増えているのです。そこで「先生，行って来ていいですか？」と言うなら，まだいい。何の断りもなく，フラフラと廊下に行って，トイレに行く。またフラフラと帰ってくる。それが反抗的な態度ではなく，ごく自然な態度で，そういう行動が表れてしまうのです。そういう子が複数いたら，もうまとまりはつかないわけです。鉛筆を削りに行く子，あるいは，もう問題ができてしまったからといって，勝手に自由帳を出して絵を描く子。問題ができてしまえばいいですけど，問題が分からないからといってお絵かき始めちゃう子もいるわけです。ひどい例ですと，じっとしているのが嫌だといって椅子の上に立ち上がってしまう。そういう子どもの場合は，先ほどTPOをわきまえていないという表現をしましたが，やはり言葉遣いや何かをその場その場で使い分けるとか，態度を変えていくこともできません。でも逆に，そういう子どもの方が，こういうばあいはこうなんだよと丁寧に教えてあげると身に付くという面もあります。この問題は時間をかけないといけませんし，昔を知っていらっしゃるベテランの先生ですと，非常に抵抗感があるわけです。3歳児じゃあるまいし，どうして初歩から教えなきゃいけないのか。授業中静かにしなさいなんて当たり前のことなのに，どうして私がここからしなきゃいけないのかと抵抗感があるのです。

高学年の場合には幼児期の問題とはまたちょっと様相が変わってくるわけなんですけれども，力くらべとして，先生に反抗するということがあります。自分よりも力の大きい大人に対して反抗したときにどういうような受け答えがなされるかというケース。この力試しというのは，一昔前からあったと思います。それ以外にいじめの問題とも絡んでくると思いますが，いじめ的な心理状態で先生に対して反抗するというのも増えているような気がします。対友達ですと諫めてくれる大人がいるわけです。親があるいは先生がそれに気づいて，そうしちゃいけないと方向転換してくれるということができますけれども，自分より立場が上の先生に対してのいじめですから，それに対して諫める人間がいないわけです。先生自身もプライドがありますから，なかなかこういうことで困っているんだということを，よほど問題が大きくならない限り外に漏らさないということになります。対先生に対するストレス解消のようないじめが1人2人の子どもから起きますと，連鎖反応的にそういう態度をとる子どもが増える傾向が報告されているわけです。

このように，低学年の学級のまとまりにくさと高学年では少し質が異なるということです。

LD，ADHDのように器質的に問題がある子がいて，その子達が核となって学級崩壊に発展するような場合というのは，核となる子の回りに非常に依存的な，幼児性を引きずっている子どもが数人いることが多いのです。そのような子ども達は，自分の方に注目してほしいと考えます。何々ちゃんは外に飛び出しちゃったけれども，何で自分が真似して悪いのか。自分はセルフコントロールしようと思えばできるわけです。器質的な問題があって，どうしてもはねとんでしまうADHDではないわけですから，我慢すれば，ブレーキをかければ，自分の行動をコントロールできるはずなのに，我慢をしたくない，そういう子の真似をしたいと言って，安きに流されてしまう。そういう傾向が非常に強くなっているように思います。先生がおっしゃるように，幼児期からの環境や何かが色濃く影響しているということは大いにあります。

司会：全員の先生にということで，東先生のほうからもう1つありましたが，進行の都合上，後に回させていただきます，先生方のお話を伺いながら，こういうことを聞きたいと待ちかねていらっしゃった方もいるのではないかと思います。大変お待たせしました。フロアの方から壇上の先生方に対してご質問あるいは自分がこういうふうに考えているんだけれども，どうなんだろうかというふうなもので，ご発言ございましたら，積極的にお願いしたいと思いますが，いかがでございましょうか。

会場1：今日は大変貴重なお話をうかがわせていただいて，ありがとうございました。私は大学の3年生で心理学を学んでいるものなんですが，今までいろいろな学会の話を聞きに伺ったりして，そのたびに思うことがあるんですが，主に岩佐先生にお伺

いしたいことなんですけれど，よく最近，今時の子どもに対して，人間関係の取り方が下手になってきていると言うのを耳にします。自分が，人間関係の取り方が下手になった時代の人間なんだなと，その範疇に入っているのを感じるんですけど，その理論の裏側に，前はよかったけど今は下手になったという視点があるような気がしまして，私自身も若い世代の一員ですから，前がどうよかったのかあまり教育されていないし，知る機会がないので，それはどうなんだろうと思ってきました。私の考えは，それは社会の変化に伴った適応なのであって，正しい人間関係とか，うまい人間関係とかあったんだろうかと疑問に思ってしまうのです。その事に関して，何か役に立つ理論とか先端で話されている話題とかあったらお聞きしたい。

岩佐：大変いいところをついていただきました。今時の若い人の人間関係って大変下手だということは，以前はよくて比較して悪くなってきたということなのかということを考えれば，私はそうじゃないと思っています。時代の変化とか，置かれている文化的，経済的，諸処の条件の中での人間関係が変わるのは当たり前だと思います。以前も人間関係の下手な方もいらっしゃった。ただ，今，私どもが若い方々とのつきあいの中で，客観的に眺めさせていただいていると，お互いが自分が思っていることをある程度出し合って，そこで丁々発止やりながら適応しあっているという感じがしません。それはそうしていないからといって，自分で満足しているなら別ですが，大変不満足な状態でもいるわけです。だから，自分と感性が，周波数が合う相手だけを求めている。そうじゃない人とは求め合わない。関わっていこうとしない。自分の世界にはいることで満足している。順応している。そういう状況に置かれていると思います。

具体的な例としては，よく友達がいなくて寂しくてということをよく訴えてくる子がいます。その子の話を聞きながら，お母さん，お父さん，周囲の方々から情報いただくと，長電話を2時間も3時間もやりあっている。学校の帰りに立ち話してまた，1時間も2時間もしゃっべっている。つまり，ものすごく話をしている。だけど心が打ち明けられない。あるいは自分のことが分かってもらえない。あるいは自分の話を聞いてもらえない。というような状況に置かれている。これは非常に孤立しているんでしょう。

そんなことを考えると，時代と共に変化する人間関係でも構わないんだけれども，明らかに下手なんじゃないか，と思うんです。ぶつかり合いながら，傷を多少受けながらということ，その傷やぶつかり合いを訓練していける基礎の基礎になるんであろう家庭という環境の中の人間関係が十分訓練されていない。そして同年代の友達の中に入ってきてしまっている，ということが大変気になる。でも，どうしようもないし，対応もありません。現代的な適応なのかもしれません。自分と合う感性の，少ない中で話をしていく，関わっていくということだけで満足していくというのも現代流の生き方なのかもしれません。それは次の世代の方々が答えを出していくことだと思います。

司会：よろしいでしょうか。では，そのほかございませんでしょうか。

会場2：今の学生の方の質問を聞いてちょっと感じたんですが，昔がよくて今が駄目かということなんですけど，それを考える1つのヒントとして，私は外国との比較というのがあると思います。今の日本の子どもが自己中心的と言われています。いろいろな日本の特徴が言われている。その特徴を，いろいろな統計が出ているので，それを比較するとかなり差が出てくるところがあります。例えば，不道徳なことがあって，それを自分がどう考えるか。好きならいいじゃないかとか，いろいろあります。それが外国との比較を見ると，外国の方が健全のような気がする。そういうふうに比較してものを考えるのも1つの方法かと。その次に，比較すると，外国は外国の社会に適応している。日本は日本の社会に適応しているんだから，両方とも適応だからいいじゃないかということになるかもしれませんが，日本の社会が健康かどうか，何が健康か病気かということもむずかしいでしょうが。そう考えると分からないことがたくさんある。同じ適応と言っても，違うところがあるのではないか。それぞれの社会の適応という観点と，外国との比較という観点を合わせてお考えになったらどうかなと思いました。

司会：ありがとうございます。他の方々いかがでしょうか。

会場3：明治学院の大島と申しますが，古典的な

研究でウィットマンという人が，いわゆるクラスで問題となる子が問題児と言うのは教育者に多くて，クラスの中で目立たない子ども，名前すら教員がなかなか覚えられない，ひっそりした子どもが大きな問題を持っているということを発表していますが，ここで学級崩壊とか言われて問題になっていますが，では，目立たない学生，生徒は，何なんだろうと考える余地もあるのではないだろうか。意外と目立つ子どもはエネルギーがあって，改善されることもあるのではないか。ですから，教員，学者，心理学者，現場に関わる者としては，やはり資料をとっておいて，10年後どうなるかというようなことが大事になってくるのではないか。

話は別になりますが，私は，実習でこの近くの乳児院に学生を連れて行くんですが，その時，未熟児セクションに行くと，10年毎に変わってきている。最初の10年は，親も訪問者もガラス越しに見る。その次の10年は，親が未熟児の病室の中に入る。その次の10年は，親が消毒の白衣を着て，保育器の中に手を入れてお腹をさすってやり，顔をなでてやる。今どういうことが行われているかといいますと，カンガルー療法をやって，お母さんが胸から袋を下げてその中に未熟児を入れて2時間3時間過ごす。それはどうしてそうなったかというと，未熟児には，被虐待症候群がある。有意差を持ってあるということなんです。先ほども講師の先生が言われましたが，乳幼児期の人間係がその後に深く関係するということが，そういうようなことからも分かるのではないか。

もう1つは，学級崩壊云々ということは，日本の文化と深い関わりがあるのではないかということです。クウェートで小児科の先生をやっていた人が，クウェートの病院で小児科の患者さんは，自由に，普段動ける子は活発に，図書館へ行ったり，サロンへ行ったり，ロビーへ行ったり，お医者さんの診察がある時に看護婦さんが探して呼び出してやる。ところが，その中に日本の子どもがいると，今日は診察の日だというので朝御飯を食べるとずっとベットにいると。その女医さんは，パートタイム・ペイシェントとフルタイム・ペイシェントと呼んでいるんですが。何か，やはり縛りつけるというか，あるところで拘束していることに耐えられるということが基準になっているのではないかという疑問を持ちました。感想のようなものでございます。

司会：ありがとうございます。目立たない子について，先生方コメントいかがでしょう。

岩佐：今，大島先生のコメントとは異なるんですけど，目立たない子というんで，典型的な事例で，私，ショックを受けた例題を1つ出させていただきます。私立の中学校で，少ない，2学級しかない学年で，1年2年3年と3年間クラスが変わらない。3年目の1月です。2年10カ月たって1言も口をきいたことがないという子がクラスに3，4人いるんです。名前なんだったっけ。そういえば岩佐だという。その関係というのは何とも言えず不思議な関係。想像できない。これは目立たないというのとはちょっと違うかもしれませんが，こんな希薄な人間関係が中学校の3年間の中で現実にあるという。そういうのを問題として突きつけられると，この子たちの取り巻いている関係の薄さをとても感じるんです。

司会：他の方はいかがでしょう。はい。

会場4：こんにちわ。私は子育ても終わりまして，放送大学の方で心理学を勉強し終えたところなんですが，今日の大きなテーマの「今，子ども達の問題にどう関わるか」ということについて，質問させていただきたい。

最近，放送大学の講師の方に連れられて，少年院をいくつか訪問しました。これは今，皆様方の話にもあった，逸脱した子ども達の話なんです。1つの女子少年院では，非常に環境のいい住宅街にありまして，近所の方が女子校と間違えて願書を取りに来るほどの，よい環境にありました。ここは，少女たちの寝るところも白木のベッドが4つくらいしつらえてありまして，小さな机もありましたから，とてもいい環境のイギリスなどの女学校の寄宿舎のような環境でした。私がそこに行きましたとき，家庭で疎外されたように育ってきた少女たちにとって，こんないい環境だったらいい子になって，すぐ戻れるのではないだろうかと思って帰ってきました。

それからしばらくして，今度は日本で最古だという少年院に行きました。すると，そこの子ども達は軍隊形式で教育されていました。部屋から部屋へ行くのに，起立して手を伸ばして1列に整列して，教室から教室へ動くという教育をされていました。先生にお聞きすると，犯罪を犯してしまうような子ど

もは，自分こそ目立とうと思うので，そういう心をなくさせるために，ここで規律を教えるから厳しい教育をしているんだというお話でした。今，子ども達に関わる私たち大人として，いったい，愛を持って接する方が正しいのか，それとも逸脱してしまった子どもには規律をまず教えるのが正しいのだろうか。それについて，先生に教えていただきたい。

司会：ありがとうございました。これは，なかなか難しいことかもしれません。先生方には申し訳ないんですが，時間も少々回っております。できるだけコンパクトにまとめてコメントお願いしいたします。愛を持ってか，規律を持ってか。伊澤先生。

伊澤：ものすごい課題を与えられましたが。私はスパルタだろうと甘やかしだろうと，どちらでも良いと思います。とことん関わればいい。逃げないで，途中で放らないで。どちらでも良いと思います。ガンガンやって，それで子どもが調子悪くなったから，あいつはこの論に合わないから駄目だということではないし，また，愛情とやらでずっとやって，それでもまだおかしい行動があったとしても，どの論でも良いですからとにかくずっと関わり続ければ自ずと答えは出るのではないかと思います。煎じ詰めれば，どちらでも有効なのではないですか。病院はどちらかというと専門性が言われるので，この範疇のこの子たちは責任を持ってしますけれど，それ以外のところは，もっと違う方法のところへどうぞと。癌なんかでも薬物療法があったり，手術があったり，そのままというのもあったり，いろいろです。

私個人としてはスパルタでも甘やかしでも，甘やかしと愛情とは別だとは思いますが，どちらでもいいのではないかと思います。とにかくそのまま関わり続けていってくれれば，それなりの成果が出ると思います。

司会：岩佐先生，いかがでしょう。

岩佐：まともにお答えできるはずないので，全然違う切り込み方でちょっと考えていることをお返ししたいのですが。少年院というのは，ご存じのように矯正教育機関です。罰を与えて罪のためのペナルティとして入っているわけではない。ですから，もう一度社会にいかに早く復帰して前と同じような生活していけるか，再犯を犯さないようにするため，正しく直していくという考え方がある。ただ，今まで壇上で話していたことも踏まえて，集団で矯正教育していく時代では明らかになくなってきている。個別化をしていかないといけないけれど，日本の矯正教育のあり方は集団で，どんな形にしろやって行かざるを得ない，という現実がつきつけられているわけです。

せっかく教育して出て行くわけですけど，再犯していく割合はどのくらいだろうかと検討していく必要があるし，もっと大事なことは，我々が見過ごしてきたことですが，犯罪とか問題行動の変化，変わり方というのは，ある意味では非常に作為的なんです。作為的というのは，去年に比べて何回増えた，減った，どんな犯罪が多くなった，少なくなった。統計はいつも表れますけど，それに関わっていた，少年院なら少年院の教官，あるいは警察官，補導をするための警察官，あるいは裁判所の調査官，こういう少年問題に関わっている諸々の行政側の人間がたくさんいます。この人間が一体どのくらいいるのか，いないのか，減ったのか，増えたのか。そういうことによって，その方々が下手すると減っちゃうと職業奪っちゃう。だから，減らさないようにしなきゃならないとかいう感じがしないでもありません。そういう見方も必要かと思います。統計上増えたか減ったかと同時に，それに関わった人間がどれだけいるのかというのを出してくれ，情報開示ですね。これがないまま，ずっと今まで来ちゃいました。そっちの方からの見方というのは全然ない。これから先，そういうのとの比較の中で見ていくというのは，われわれ，私のようなそれで食べていっている人も，そういう見方が全然なかった。それをこの10年来とても反省しています。それを見せてほしいといっても，全然出ないです。

余分なことですが，飴か鞭かといえば，両方していかざるを得ないというのが現実だと思います。

司会：小林先生いかがでしょう。

小林：規律重視か愛かというのは，同じ物差しで計れないように思います。尺度が違いますから，どちらをとるということはできないですけれど，あえて申し上げるなら，両方必要です。軍隊形式で行進するというのは，ちょっとどんなものかなと思いますが，そうではなく，ある程度の規律，規範というのは必要です。社会的な自立というのが，どんな子どもにも必要なわけですから。社会的に自立には，ルールを守るということが必要になってきます。授

業中に何でみんな一斉に座っていなきゃいけないのかというと，静かに聞くというのは，隣に座っている友達のためにもなるのです。自分が騒いでしまうと，他の人が迷惑になると考えて規律を守るいうことは隣の子への愛に通じるわけですから，愛をとるか，規律をとるかというのは，むずかしい。やはり規律も必要ですし，愛も必要です。その方法は，ケースバイケース，その子のパーソナリティ，抱えている問題，取り巻く環境によってさじ加減は変えていく必要はあります。

司会：ありがとうございました。よろしいでしょうか。

もうすでに時間が10分程超過しています。申し訳ございません。進行があまり上手ではございません。

フロアの方からもいくつかご質問あるいはご意見をちょうだいいたしました。私ももっともということで聞かせてもらいました。また，先生方のそれへの回答というのもなるほどということで聞かせていただきました。

東先生からは，それに対しまして，子どもの問題に関わるということは，援助や，支援であるということで来ているけれど，ほっておく，何かを待つという姿勢も必要でないかということが質問という形で投げかけられたんですが，これに対しまして，先生方お一人お一人に伺う時間がございません。

「支援や援助で，こちらから出ていくのではなく，黙ってみていること，それも必要じゃないか。」これを私たち一人一人が宿題として持ち帰って，今，子ども達の問題にどう関わるかということを考える際，の視点の中にもぜひ取り入れていきたいな，いければいいかなと思います。回答を各先生からいただけませんでしたが東先生よろしいでしょうか。

神田：ありがとうございました。ちょっと時間が超過してしまいましたが，少しだけ，企画者としてまとめさせていただきます。

岩佐先生から，携帯電話の話など出ましたけれど，私の子どもは2人います。上の子が高校2年生ですが，やはり携帯電話を持ちたがりまして，私も買おうということで，私のはPHSですが，18秒1円ということで，いかに早く用事を済ますか。月に通話料200円以内という私なんですが，子どものほうは二，三カ月使っているうちに，だんだん通話の料金が増えまして，8000円とか9000円になっている。とうとう駄目ということで契約を解除したわけですが。その翌週くらいに，ある友達の娘さんが45000円も使ったという話を聞きまして，すごいなと思いましたが，今日うかがって18万いくらということでさらに驚いたんです。ここで私，感じましたのは，子どもなりにバランス感覚を持っているんじゃないかと思いました。つまり，その家の家計について何となく分かっている。その範囲内で遊んでいるという気さえしました。

バランス感覚ということでお話しさせていただくと，対人関係が上手にとれないというあたりが，多分様々な経験を経ることがない中で育ってきた人たちが，バランス感覚をうまく持てない。それが人への関わりということで，出てきているのかなと。1985年くらいに，法政大学に中野先生という方が，現代若者文化論という本を書かれているんですが，その中にカプセル人間というキーワードが出てきまして，それをご説明する時間がないんですけれど，その当時から若者の対人関係が変わってきているということを指摘されています。これは，1970年代の前半から，その先生はすでに感じている。つまり，私は40代半ばなんですけれど，ちょうど高校生，大学生くらいで，その頃から当時の大人から見ると若者の対人関係はちょっと変わってきているということです。つまり，もう，今の大人も対人関係が上手でない可能性を持っている。その中で子ども達が育っているということがあるだろうと，そんなことを感じました。

最後にちょっと余計になりましたが，今日はお忙しい中，皆様にお集まりいただきましてありがとうございました。とても有意義なシンポジウムになりました。シンポジストの先生方ありがとうございました。お集まりいただいた皆さん，ありがとうございました。今一度拍手をお願いいたします。これにて閉会いたします。